

41487

教科書文庫

4

810

41-1929

2000 30/683

T  
S

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

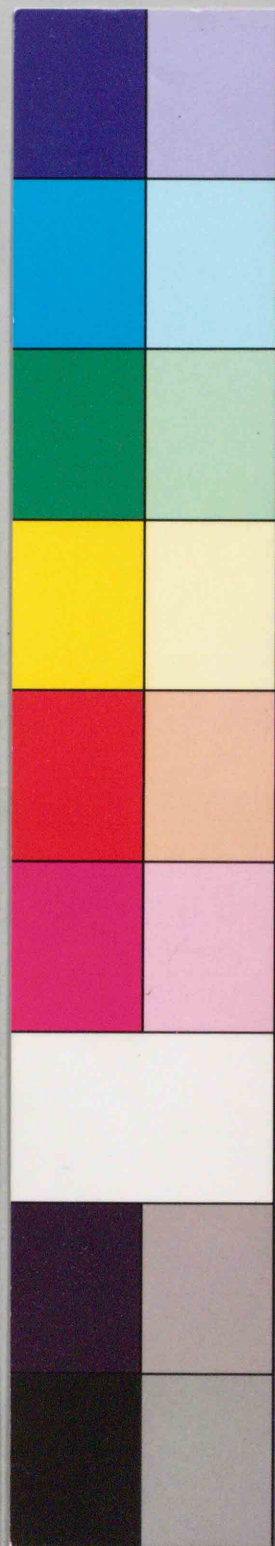
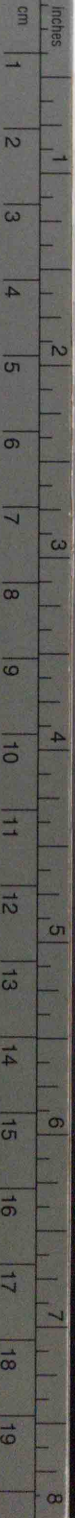


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
Ue4  
資料室

國語讀本

改訂版

卷一



資料室

375.9  
Ve 4.

日五廿月三年四和昭  
濟定檢省部文  
甲科語國校學中

# 國語彙本 卷四

昭和改訂版

文學博士

上田 萬年

榮田 猛猪

鹽野新次郎 編 共

國語讀本 卷四

目次

前篇

一 明治天皇御製

二 玉の御聲

歌に關する語

三 趣味の巖島

俚謠一首

四 熱帯の海

五 小さな旅人

薄田泣菫 元

島崎藤村 三

五十嵐 力 八

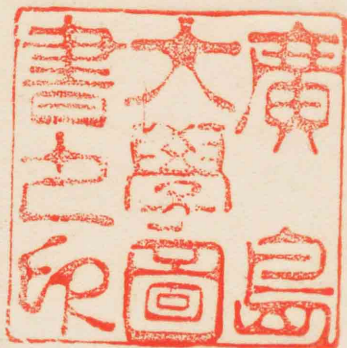
歌に關する語 七

芳賀矢一 三

明治天皇御製 一

目次

一



六 信濃路

二五

一 木崎湖

阿部次郎 二五

二 鳥井峠

正岡子規 二七

三 寢覺の床

太田南畝 二九

四 木曾御嶽

島木赤彦 三〇

五 善光寺

小林一茶 三一

七 俳句評釋(俳句)

三三

八 武士道

山路愛山 三六

諺語五則

四〇

九 乃木將軍(詩)

森鷗外 四〇

楠公以後第一人

黒岩周六 四三

一〇 スポーツの境地

土岐善麿 四五

一一 一本の足

厨川白村 四七

諺語七則

五〇

一二 轡十文字

菊池寛 五二

一三 言葉の變遷

佐々醒雪 五三

一四 大日本國語辭典の序

芳賀矢一 五五

一五 學徒に示す

萩野由之 五七

散亂心

幸田露伴 五九

一六 冬枯の大井川

千葉龜雄 六〇

俚謠三則

九五

七 寒稽古

中川霞城 六

語句の轉義

一〇三

八 土の歡喜(詩)

河井醉茗 一〇四

九 要談と閑話

徳富蘇峰 一〇五

語句の斷續

一〇八

一〇 道話二篇

柴田鳩翁 一〇九

一 一 わが家の富

徳富蘆花 一一六

二 蘆庵と君平

瀧澤馬琴 一二〇

和歌一首

一二〇

三 桃山御陵

田山花袋 一二二

四 南洲遺訓

西郷隆盛 一二五

後篇

藩翰譜抄

一

藩翰譜に就いて(参考)

一

一 紀伊大納言頼宣

三

二 鷹狩のえもの

四

三 本多重次

七

四 板倉重宗

一一

五 淺野長政

一五

六 山内一豊

六

七 武士氣質

三

八 人の諫

六

樂訓抄

元

樂訓に就いて(参考)

元

一 山水風月の樂

三

二 光陰箭の如し

三

三 清福

四

四 旅行の樂

五

五 四つの始

六

六 花ざかり

六

七 夏木立

四

八 端居の風

四

九 萩の下露

四

一〇 秋草

三

一一 埋火

五

一二 守歳

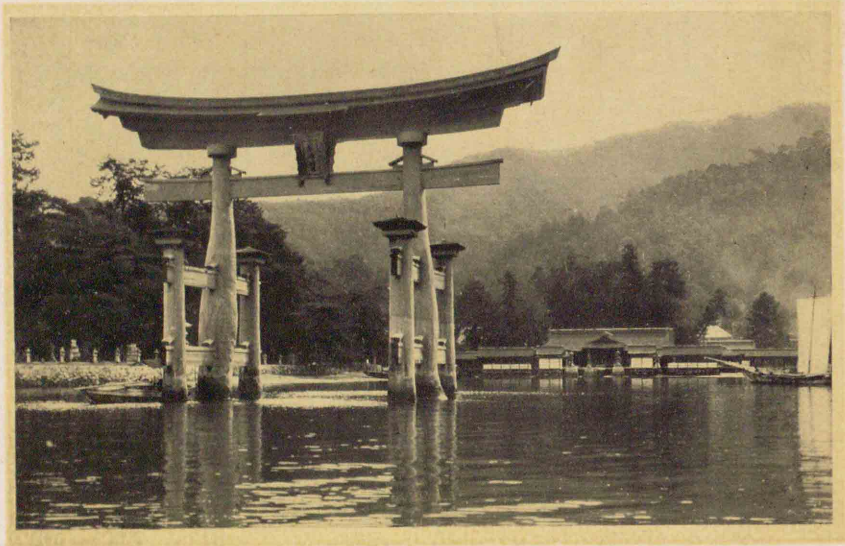
四

一三 六つのだすけ

四

一四 つくづくと思へば

四



— 社 神 島 嚴 —



明治天皇  
明治四十五年  
崩御、御年六十一。

國語讀本卷四

前篇

一 明治天皇御製

とこしへに民安かれと祈るなる

我が世をまもれ伊勢の大神

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

わが民草のうへは如何にと



子らは皆戦の場に出ではてて

翁やひとり山田守るらん

四方の海みなはらからと思ふ世に

など波風の立ちさわぐらん

浅みどり澄みあたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

羊々におもひやれども山水を

汲みて遊ばん夏なかりけり

とる棹のこゝろ長くもこぎよせん

蘆間の小舟さはりありとも

芳賀矢一

福井縣の人。  
文學博士。昭  
和二年歿。年  
六十一。

家隆

藤原氏。歌人。  
嘉禎三年(約  
六九〇年前)  
歿。年八十。

二十一代集

古今後撰拾遺  
葉・詞花・新  
載・新古今・新  
勅撰・續後撰  
遺・新撰・玉  
葉・新撰・後  
續拾遺・風雅  
新撰・新拾遺  
遺・新撰・後  
續古今

## 二 玉の御聲

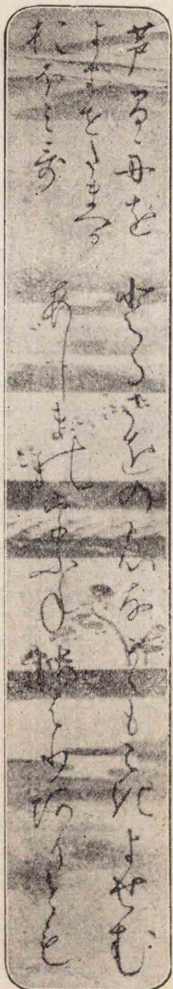
芳賀矢一

明治天皇の御製が二十萬首もおありなさるごいふことは、あらゆる點に於て、東西古今の君主を凌駕し給ふ御事蹟の一つとして、驚嘆し奉るより外はない。

大天皇のすべての鴻業が神業であるやうに、これも一つの神業である。古來最多作の歌人ごいはれた家隆卿でさへ、天皇に比べ奉れば物の數でもない。歴代の勅撰二十一代集の歌の數が總計三萬數千首、その幾倍の數をお一人で

億億億

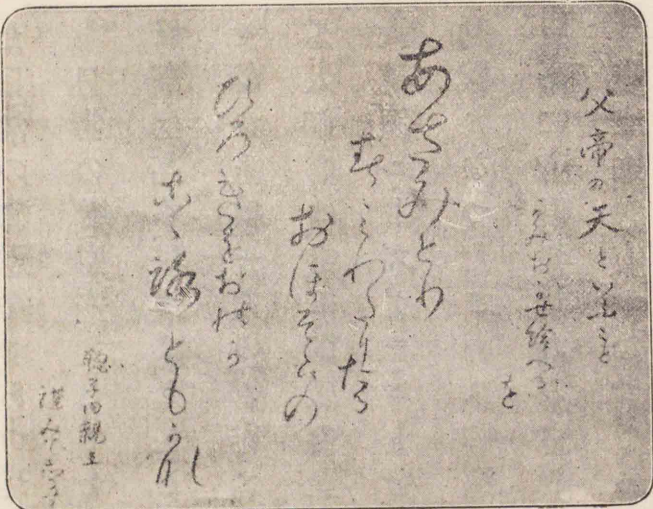
お作り上げなされたのは、眞に人間業ではない。かくも多数の御製が、最も多事な明治の御治世に於て、萬機親裁の餘に成つたことを考へ奉れば、その御精力の絶倫であらせられたことは、いつの世、どの國にも類例がない。皇威を四海に輝かし、皇國を世界一等國の班にお進め遊ばした大業ごゝもに、言の葉の道に於ても空前の偉績をお示しになつたことは、億兆の欽仰し奉るところで、千代萬代がけての語り草である。



明治天皇御製 昭憲太后御筆

誤娛

性



明治天皇御製 聰子内親王殿下御筆

御精力の絶倫にあらせられたことは、いふまでもないが、かくも多数の御作のあつたことは、平素何等の娛樂をも近づけ給はず、酷暑嚴寒の時にも、一度ごして遊幸の仰出がなく、常に宮中におはして、唯一の御慰みごなされたのが、即ち和歌であつたからである。これを思ふご實に恐多いごで、且またその神々しい御性格を窺ひ奉ることが出来る。御製を拜誦し奉る

作祚

一首の歌

四方の海皆は  
らからと思ふ  
世になど波風  
の立ちさわぐ  
らの御製。

米國第二十六  
代大統領。大  
正八年。大

講和  
日露戦役の講  
和を指す。

ものは、一言一句、これが即ち萬機親裁の餘、お寛ぎ遊ばされ  
た日常の御慰安であつたといふを拜察せねばならない。  
日常の御慰安としてお詠み遊ばされた數々の御詠、その  
風調は高く、規模は大きく、いかにも萬世一系の帝祚を踐ま  
せ給ふ上御一人の御作と窺はれる。國を思ひ民を憐み給  
ふ大御心は、常に御製の上に現れてゐる。一首の歌が米國  
大統領ルーズヴェルトを動かして、講和仲裁に盡力させる  
動機となつたといふ御逸話は、三十一文字の和歌が、千萬の  
兵馬にも優れた力のあることを示したもので、和歌始まつ  
て以來未曾有のことである。まして七千萬の國民が日常  
拜誦して受ける偉大な感化に於ては、何等の經典もこれに

奔茶

並ぶものはない。日々の御慰みが直ちに國民教化の源泉  
となる、これほどの貴さがいつの世ごこの國にあらう。  
明治時代の詔勅は森嚴雄大、永く國史を照して、後世の國  
民に聖代を語り典範を示すのである。しかし詔勅にはそ  
れだけの形式があり、また聖意を承けて起草する人のある  
ことも明白である。御製は直ちに大御心の發したもので、  
これを拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するの  
である。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽する光榮を  
有することは、實にわが國民の特殊な幸福である。

○  
御製 御歌 御歌所 御歌會始 みそひこもじ

敷島の道 歌合 歌枕 色紙 短冊

五十嵐力

國文學者、早稲田大學教授、文學博士。

彌山

島中の最高峰。

邊(辺)

### 三 趣味の嚴島

五十嵐 力

趣味の眼から見た嚴島の中心の味ひは何處にあるかといへば、吾等は第一に彌山を背景として立つた低い美しい社殿を、あの大鳥居のあたりから眺めたところにあると思ふ。

先づ藝州本土の對岸から船を僦うて、ぎい／＼と櫓の音面白く漕ぎ出でる。青一色で塗りつぶした様な恰好のよい島だ、と思ひながら漕いでゆく、その一色の中から、違つた色彩の社殿や堂塔やが、次第に著しく浮出て来る。初に

袴袴跨



嚴島神社

は木片を立てたやうに見えた鳥居が、段々大きなを加へて来る。また漕ぐ程に、鳥居も社殿堂塔も、益々大きき鮮かさを加へて来る。その中に次第に進んで大鳥居の下に来ると、吾等は覺えず驚きの目を見張るであらう。見よ、目の前には、高さ九間、棟の長さ十三間、地軸も天柱ともいふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨つて居るではないか。向うを見ると、青雲の中に沖つた彌山の麓には、二十幾棟の社殿が美しく左右に伸びて、赤い柱がゆるやかに反つた檜皮葺の神々しい姿を、水面に映し

擊繫

て居るではないか。その色彩を見よ、形状を見よ、一つ一つの建物の整つた姿を見よ、多くの建物が廻廊や橋に繋がれて、美しい釣合を現はして居るのを見よ、何といふ美しさ、高さ、神々しさであらう。

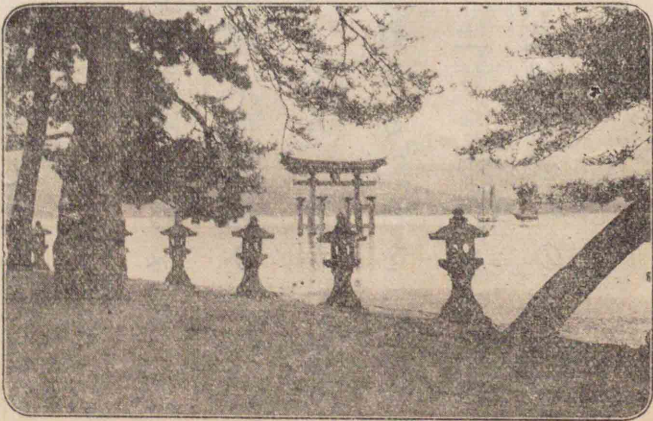
社殿の中心たる本社は寶殿である。寶殿の左右に、百二十七間といふ長い廊下が廻らされて、その間に百八つの神さびた鐵の燈籠が釣つてある。この寶殿を中心として、檜皮葺、瓦棟の多くの建物が、朱塗の圓柱に支へられて低く美しく並んで居る趣、縦向き、横向き、いろいろの社殿が仲よく馴染んで、大鳥が翼を廣げた様に横長に建つて居る趣、更に晝は鮮かな色と美しい形とを細かに見せ、夜は百八の燈火

點(点)

干于

干<sup>カ</sup>于<sup>ウ</sup>  
ぼ<sup>ウ</sup>う  
ね<sup>ウ</sup>

——白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥しい數に上る燈火——を天上の星にまがへ、干潮には大地に立つた脚長のすくやかな姿を見せ、満潮には波の上に浮んだ龍宮城の幻のやうな光景を見せる趣、此等のすべてが何とも言はれぬ調和をなして、緑の山と白波の海との間に鎮まつてゐる趣、高さ、大きさ、物々しさ、荒々しさは、前後の護衛者たる山や海や鳥居やに譲つて、社殿自らは、干木も堅魚木も鷗尾



大島神社の居島

朱未末

も鯨銚もない尋常な檜皮葺を、朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横へてゐる趣。この重疊累積した美しさゆかしさを何に譬へようか。

私はあの社殿を見る毎に、よくこんな事を考へる。設計者の鬼神は、海底で出来上つた龍宮城を、巖島のあの入江に据ゑる爲に、波の上にせり上げたであらう。靜かにせり上がるのを凝視しながら、山と海とに對する釣合を見計つて、こゝだ！こいふ處で、びたりこせり上げを中止させたであらう。そしてこれを眺める恰好の立脚點を、今の大鳥居の位置に定めたのであらうこ。(甲鳥園隨筆)

凝視 熟視

安藝の宮島廻れば七里浦は七浦七夷(俚謠)

### 四 熱帯の海

島崎藤村

島崎藤村  
長野縣の人、  
名は春樹、文  
學者。

船は印度の南端を過ぎた。時をさするに驟雨が印度洋へ來た。それが我々の甲板へ吹きこんだ。合奏のやうな海の音も聞えた。雨後は殊にむしあつい。熱を帯びた白雲が行手の空におこつて、其處にあるものは永遠の眞夏かこ疑はせた。

ふと波の間に一艘の汽船が見えた。我々の甲板から其の汽船を認めた者は、何れも欄の處に立つて眺めた。「あゝ、日本の船ではないか。」私は自分で自分に言つて見た。其

奏泰奉

牆檣

マルセーユ  
佛國の地中海  
岸の港

エルネスト  
シモン  
佛國郵船の  
名、作者の乗  
れる船

の二本の檣、其の一本の煙筒、我々の乗船に比べるに、自ら構造を異にした其の黒い船の形、皆見覚えがあつた。私は艦の方の太い綱の積んである甲板の上に走つて行つた。其處から船を望まうとした。神戸出發以來、我々の船と前後して、マルセーユへ向ふ郵船會社の汽船があつたから、波間に見えるのも其の船らしく思はれた。

貨物を積むことの割合に少くて速力の多く出るエルネスト・シモンは見る間に其の船に追付いた。遠く離れて來た自分の國を一つの船にして見せてくれるやうな其の形が、宛も繪卷物のやうにして私の眼前にあつた。私は青く光る波を隔て、向ふの甲板に集る人々の影までも望むこ

帽(帽)

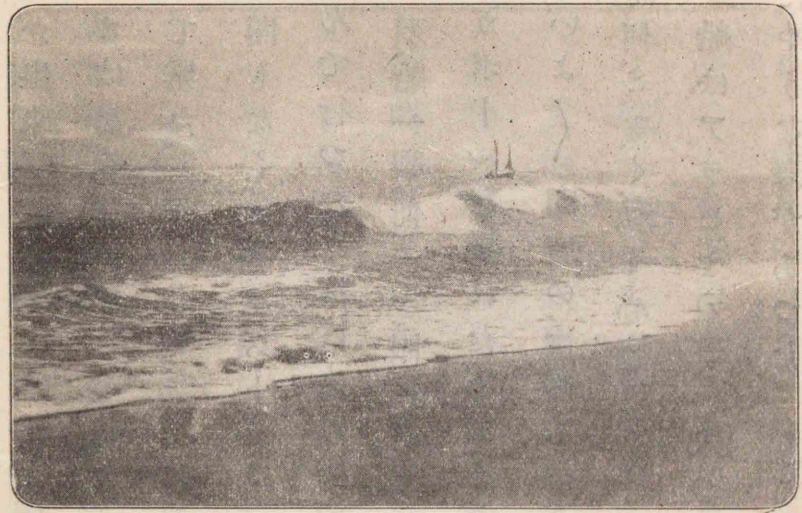
シंगाポール  
海峡植民地の  
首都、馬來半  
島の極南端  
コロンボ  
セイロン島の  
首都

こが出来た。果してそれが同胞であるか否かを見定めることは出来なかつたけれども、私は頻りに自分の帽子を振つて見た。

間もなく、エルネスト・シモンは其の船を遠く後に殘して進んで行つた。海はまた沙漠のやうな空虚に還つた。鳥一羽、船一艘、何一つ眼に入る物もなかつた。我々の船がシंगाポールを離れた頃は、まだそれほどにも思はなかつたがいよいよ、印度の南端も過ぎ、コロンボもはや後になつた時何ごなく私も心寂しさを感じて來た。

船はアラビヤの海へ入つて行つた。其處には油を流したやうな海があつた。どろりとした青い波は幾趣幾様か

皺皺



の渦と皺と紋とを描いて見せた。白い雲の影が海に映るほどの晴れた日で、其の静けさは熱帯らしい静けさであつた。どうかするに海は蛇のやうな肌の滑かさもも見せた。私は又波間に群れ飛ぶ銀色の飛魚をも見て行つた、夕日に燃える火の海をも見て行つた。

夕風の楽しさに、甲板では

珍(珍珠)

抱胞泡

皆思ひ／＼に涼み話を持寄つてゐた。私はもう自分の皮膚の色の異なつて居るここなどをさほど感じないで、皆の涼み話に耳を傾けてゐた。「失禮ですが、私はMといふ者です。コロンボから此の船に乗つて参つたものです。」と、其の時私の側へ来て名刺をくれた日本の絹商があつた。こんな外國人ばかりの中で、珍しい同胞に遭つて、國言葉で話が出来ようとは全く私も思ひがけないことであつた。

日の光はアラビヤの海に満ちてゐた。人を避けて私は海を見に行つた。一切を忘れさせるものは海だ。躍れ、躍れ、海よ躍れ。舷に近い白い大きな花輪を見る様なのは、われ／＼の船から起す波の泡であつた。忽ちその泡が近い



趾跡

波の上へ擴がつて行つて、星のやうに散り亂れて、やがて痕跡も無く消えて行つた。私は遠く青く光る海のかなたに、無数の魚の群かとも思はるゝ波の動搖をも認めた。條理もなく筋道もない海。先蹤もなく、標柱もない海。豊富で、しかも捉へるここの出來ないやうな海。何處を出發點とも、何處を結末とも言ひ難いやうな海。私の眼に映るものは唯日の光であつた。波の背に反射する影であつた。藍色の波の上に浮き揚つて、やがて消えて行く泡であつた。波と波と相撃つて時々揚がる水煙であつた。光と熱と波とは殆ど一つに溶け合つて、私は自分の身體までその中へ吸はれて行く思をした。(海へ)

薄田泣菫

名は薄介、岡山縣の人、詩人、文章家。

五 小さな旅人

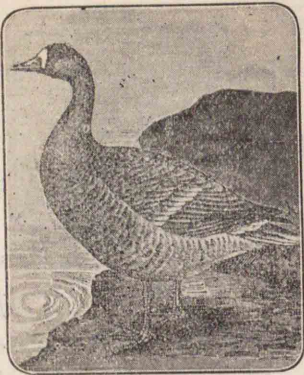
薄田泣菫

私達が七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私達はそれを見かけるに、吹き

さらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

雁よ、棹になれ。

棹になつたら、釣になれ。



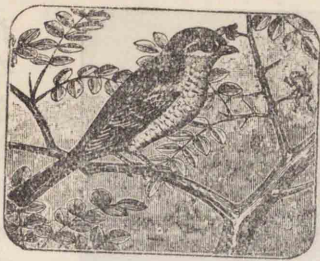
雁

と、その長い行列が次第に雲の中ににじみこんでしまふまで、聲を囁らして叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少なくなつて、今では晝間その長い列が空を渡るときは、よくよく人氣遠い野原かどこかでないこと滅多に見られなくなつた。

釣釣釣

五 小さな旅人

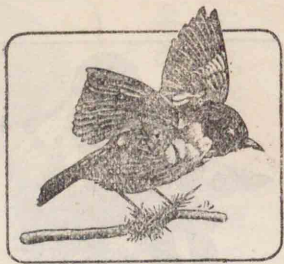
その頃は又後の岡に行つて見るに、葉の落ちかゝつた雑木林に小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥といふと、私は海などを越えて來る彼の小さな旅人のあわたましい旅を考へて、いつも言はうやうのない淋しい旅心地を覺える。



百舌

まづ百舌が來る。秋の彼岸が過ぎてそろそろ日影が黄色がかつて來ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の午過、そこの木立で甲高い鋭いその聲を聞く事がある。「あゝ、もう秋だな。」と思はず振返つて見るに、矮小な櫟にまじつて、ずばぬけて丈の高い楡の木に百舌が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきら／＼してゐる。私たちはその瞬間、言はうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

辭(辭)



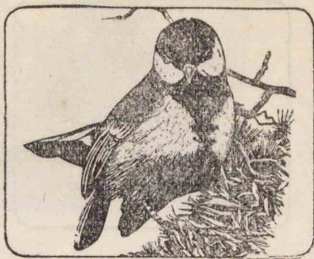
鶉

次には鶉が來る。山家の午過、だるさうな蟋蟀の聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと耳に入る静けさの底に、どこやら窺れた人の溜息とでもいつたやうな微かな聲が洩れて來て、何の音ともわからない。すると、樹蔭の萐烟かどこかで、餘念もなくせつせつ仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥がついと身をそらして逃げていつてしまふ。それが鶉だ。鶉といつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、大抵は連に離れてたゞ獨りで出て來る。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよく／＼と軽い御辭儀をして、さゝやくやうな聲でうたひ出す。私はそれを見ると、他のため、世の中のためといつたや

啄

うなわけでなく、自分一人の爲にうたつて、それで満足してゐる人  
たちを思ひ出さずにはゐられない。

鶉が來ても、十日も経たぬ間に四十雀が來る。この鳥は鶉



雀 十 四

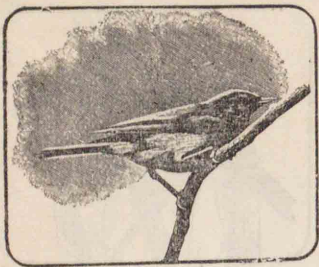
と違つて十羽も二十羽も群をなして來  
る。山から里へ移る折などには、まるで  
時雨でもするやうに、細かい羽音がさつ  
と空を掠めて聞える。そしてそこらの  
木立におりるなり、めまぐるしいほどす  
ばしこく、雀のたごなどを啄きまはしな  
がら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せて、銀の鈴をふ  
るやうな透通つた聲で早口にしやべり續ける。で、かうした大層  
な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない、灰色の産毛そのまゝ  
の雛兒が交つてゐて、ごうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり

擔檐

打つて宙に返ることもあるが、そこは又慣れたもので、いきなりひ  
よいと下枝につかまつて、ませた身振で樹肌のひびきを啄いたりす  
る。まるで山家育ちのすばしこい、きさくな魂そのものを見るや  
うな氣持がする。

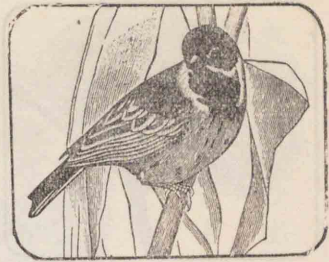
小雪がちらつく頃になると、鶉鶉が來る。これは鶉と同じやう  
に大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして來る。

冬の初の午過、山近い田舎の小家で、爺は炬燵に潜り込んで、こくり



鶉 鶉

こくりと居睡をする。その側で婆さんはせつ  
せと絲車を繰つてゐる。檐に吊した干菜の影  
が煤けた障子に見すぼらしく映つて、時折ちつ  
ぽけな小鳥の影がちらついたりする。ごうか  
して絲目が切れて、睡さうな錘の音がぼつたり  
止むと、こそくと掛菜をむしる音がする。が、



白 頬

老人の耳にそんな音の聴取れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、びよい／＼と小刻みに籬を傳つて、隣から隣へと狭苦しい物蔭を出たり入つたりして移つて行くのだ。それが鶉鶉である。

鶉鶉と後先になつて頬白が来る。冷たい雨のびし／＼と降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までぐしよぬれになつて、しよんぼりこそこの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。  
子供泣かすな、火の用心。

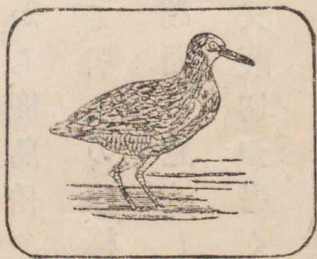


鶉

今度の便に金十兩。

やりたいけれど、一文も御座なく候。

と言傳へてゐるのを思ひ出して、しみ／＼と世渡のむづかしさと、旅心の寂しさを思はずにはゐられない。



鶉

うしろの雜木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもうそろ／＼鶉が來、鶉が來る。(畿内行脚)

### 六 信濃路

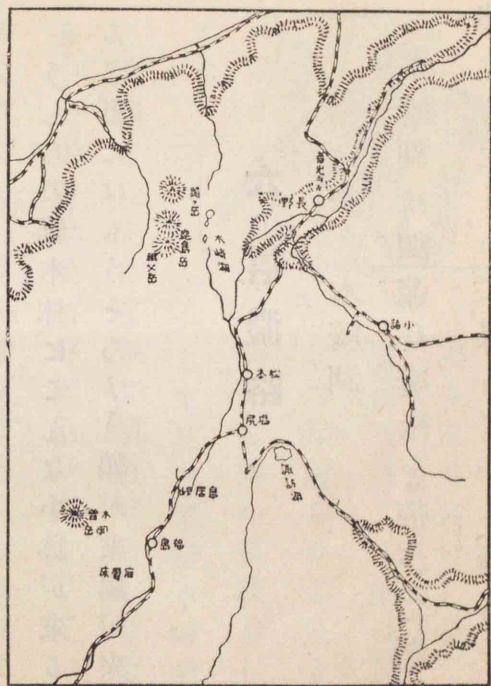
#### 一、木崎湖

木崎湖は幽邃な凄味を帯びた湖ではないが、人事この交渉をあたゝかに保ちながら、清らかな澄んだ感じを失はな

阿部次郎

阿部次郎  
山形縣の人、  
哲學者。東北  
帝國大學教授  
木崎湖  
長野縣北安曇  
郡。

鹿島・鐘・祖  
父  
日本アルプス  
連山。



ケ岳や祖父岳の雪を戴く峻峰が頭を出して居るのは、極めて鮮かな印象を與へる。宿屋の二階から湖面を見渡してゐると、山鳩が鳴き、郭公が鳴き、老鶯が鳴き、又葭切が鳴く。さうしてこれ等の鳥の聲によつて益、深さを加へる靜寂の

いところに、この湖に特有な懐かしさがある。湖を繞る端山には、森といふ程の森もないが、緑なる端山の峰の稍、低くなつてゐる間から、鹿島岳や鐘

感じを伺ひはう。さうして朝は又水雞の叩く音も聞え、夜更には時鳥の聲も耳にひびくのである。(北郊雜記)

二、鳥井峠

正岡子規

正岡子規  
名は常規、松  
山市の人、佛  
人、明治三十  
五年、年三十  
十六。

信州の旅行の時、道ばたの家に苗代ぐみが眞赤になつてをるのを見て、余はほしくて堪らなくなつた。駄菓子屋などをのぞいて見ても、ぐみを賣つてゐるところは無い。木曾路へ入つて贄川まで來た。こゝは木曾第一の難處と聞える鳥井峠の麓で、名物蕨餅を賣つてをる。余はその茶店に休んだ。女主人が余にむかつて、蕨餅を食ふかと尋ねるから、余は蕨餅は食はぬが、ぐみは無いかと尋ねた。そのぐみといふのが分らぬので、女主人はそこらに居る男ども

鳥井峠  
長野縣西筑摩  
郡、木曾谷に  
入る峻嶺。

に相談して見たが、誰にも分らなかつた。余は再び手眞似を交せて、解剖的の説明を試みたところが、女主人は突然、ああ、さんごみか、ごいつた。それならば、うちの裏にもあるから行つて見ろごいふので、余は臺所のやうなところを通りぬけて裏まで出て見ると、一間半ばかりの苗代ぐみに、赤い實が累々としてなつてゐた。これをくれるかごいへば、いくらでも取れごいふ。余が取つてゐると、そばへ一人の男が來て取つてくれる。手巾に一杯ほど取りためたの



心細いぞ木曾路の旅は笠に木の葉が散りかゝる (俚諺)

旅装の親子

疑款(款)

太田南畝

名は寧、徳川幕府の士、文章に巧なり、政六年(約百七十五)

寢覺の床

木曾上松縣の南、溪流中の磯石をいふ。名勝たり。臨川寺を指す、寢覺の床を俯瞰すべし。

で、余はきりあげて店へ歸つて來た。この代はいくらやうかごいふご、代はいりませぬごいふ。仕方がないから少しばかりの茶代をおいて、余は馬の背に跨つた。女主人など丁寧に見送つた。菅笠を被つてゐても木曾路ではかういふ風に款待をせられるのである。(子規遺稿)

三、寢覺の床

太田南畝

寺の童は案内して、浦島寢覺の床を見よごいふ。本堂の前なる松の下より、岸に臨みて見おろせば、大なる岩あり。岩の上に松生ひしげりて辨天の小社あり。床岩、象岩、組板岩、屏風岩、獅子岩、疊岩など、各その形ありごいへど悉くは見分かず。まろき穴のあきたるを釜岩ごいへり。向うの岸

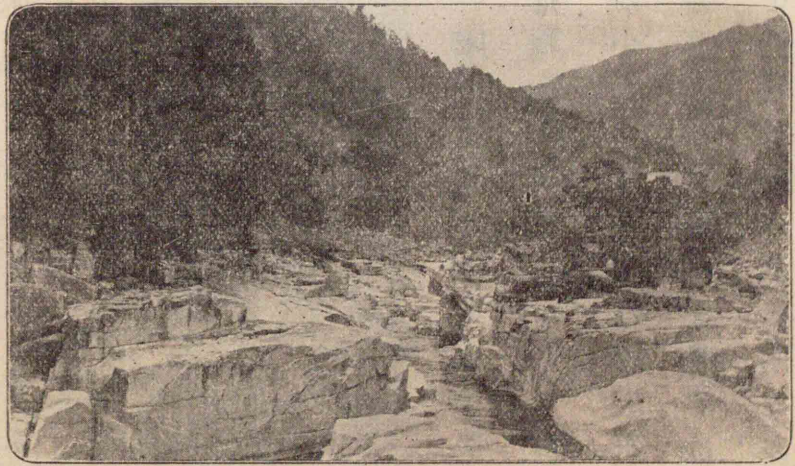
は數十丈の岩峙ちて、松生ひ茂り、峯の嵐、谷の水、音に響きて、浮世の塵をも洗ふべし。これ床山なりといふ。(壬戌紀行)

四、木曾御嶽

島木赤彦

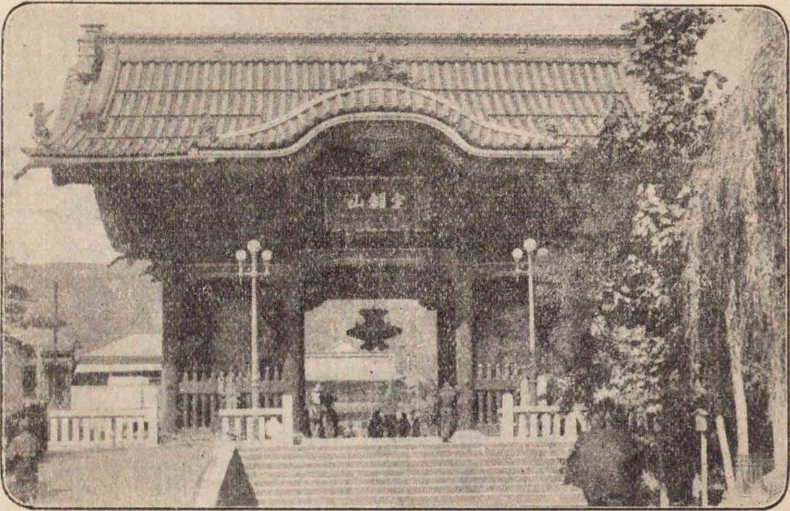
天つ日や沈みたるらし山の  
上にたゞ平なるはひ松のは  
ら  
梅の木の木立出づればごみ  
にあかし山をこぞりてだ

島木赤彦  
本名久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年歿、年五十一。



床の覺寢

小林一茶  
通稱彌太郎、信濃の人、俳人、文政十年(約百年前)歿、年六十五。  
善光寺  
長野縣長野市、天台宗。



善光寺

に岩むら  
山の上にわが子ご居りて雲  
の海の遠べゆのぼる日を拜  
みたり

五、善光寺

小林一茶

陽炎や手に下駄はいて善光  
寺  
春風や牛にひかれて善光寺  
朝寒の中にまゐるや善光寺

七 俳句評釋

芭蕉

松尾氏、俳人。  
正風俳諧の  
祖、元祿七年  
(約一三〇年)  
歿。年五十一。

鳴雪

内藤氏、名は  
素行、松山の  
人、俳人。大  
正十五年歿、  
年八十。

鶯や柳のうしろ藪の前

芭蕉

鳴雪 閑居して鶯を聞くところの情況と見える。鶯が

啼く。或は柳のうしろあたり、或は藪の前の方と、あちこち

で啼く。黄鳥もたのしげで、自分も娛しく、共にこの遅日を

暮してゐるといふやうな意だ。長閑な春の心も見えて面

白い句である。この句の鶯は、一羽か數羽かなどと穿鑿を

せず、たゞホウホケキヨウが彼方此方で聞えてゐると、淡白

に見ておけばよからう。

瓊音

沼波氏、名は  
武夫、名古屋  
の一人、昭和二  
一年歿、年五十

やせ蛙負けるな一茶これにあり 一茶

瓊音 一茶は悲惨な家庭で育つたので、弱い者に大變同

情を持つてゐる。この句なども單に滑稽のみでなく、裏面

には溢るゝ如き同情が見えよう。蛙合戦がはじまつてゐ

る。瘦せこけた蛙が出て、非常に苦戦に陥つてゐる。そこ

で一茶が瘦蛙の肩をもつて、敗けるなく、俺がこゝに居る

ぞといつて、頑張つてゐる所である。ちよつとしたポンチ

繪のやうな有様が目に浮ぶ。何だか一茶までが瘦せた人

であるらしく思はれる。

五月雨や大河を前に家二軒

燕村

鼠骨 五月雨が降つてゐる。大河がある。その大河を

前にして家が二軒並んでゐるといふので、大河のここでも

あり、五月雨のふる頃なれば、濁水が滔々として勢強く流れ

燕村

谷口氏、後、與  
謝氏、俳人、  
天明三年(約  
一四〇年前)  
歿。年六十七。

鼠骨

寒川氏、名は  
陽光、俳人。  
雜誌記者。



てゐる。見渡す限り、水と雲と雨とで何ものもない。その中にこの恐しい大河を前にしてたゞ二軒、家が立つてゐる如何にも心細いことである。大河を前にして、雨の中に小さな家が二軒ある、こいふ客觀の景色を現して、その客觀を通じて、物凄いな事だ、家の人も心細からうこいふやうな主觀をも現してゐる。

高館

岩手縣平泉にその址あり、文治五年源義經ここに死す

高館にて

夏草やつはものどもが夢のあと

芭蕉

鳴雪。奥州の高館である。嘗て義經が居たのを泰衡が滅した所だ。その昔を偲んで、今は夏草が茫々と茂つてゐるのみだ、城のあとも見えず、又義經を始とし、辨慶とか四天王

四天王

鎌田盛政、同光政、佐藤繼信、同忠信

其角

榎本氏、俳人、芭蕉十哲の首、寶永四年(約二〇四年前)歿、年四十七

碧梧桐

河東氏、名は乘五郎、松山の俳人、思想家

乙由

中川氏、俳人、芭蕉の末弟、元文三年(約一七〇四年前)歿

王とかいつたつはものも居ぬ。たゞこの夏草のみが、そのつはものどもの夢のやうな生涯を送つた跡の名残となつて茂つてゐるのみだ。こいつたのみである。又夢の一字は遠き昔種々なる恩讎で戦つた軍兵も、要するに一場の夢であつたといふ意も見える。誦して餘韻限りなく、千百言をつらねた懐古の漢詩にも勝る感がある。

稻妻や昨日は東今日は西

其角

碧梧桐。この句は、乙由の「萍やけふはあちらの岸に咲く」ご、よく似た句で、世上に喧傳されて居る。句の趣意は、稻妻が昨日は東の方で光つたが、今日は西の方で光る、一向ごりごめもないものだ、こいふのに外ならぬ。が、稻妻こいふ裏

には、佛語の電光石火なごといふ、人生のはかない事を諷した意味があるので、人間五十年の命、稻妻の東かと思へば西、西かと思へば東、ごいふやうに、とりごめなくはかなく終る、ごいふ心持を婉曲に現したものと見てよい。稻妻そのものの光景、その光が強いごか弱いごか、又稻妻のする夜がもの凄いいごか淋しいごか、いふごは現はれてをらぬ。稻妻のごりごめないごいふ性質に關したごを叙したのであるから、景色などの、理窟のないものに趣味を感じぬ俗人はこの句を見て、うまいごをいふご嘆稱するであらうと思ふ。世上に喧傳される原因がそこにある。けれども、句としては固より、價値は薄いのである。

鹿ながら山影門に入る日かな

蕪村

鼠骨。 山の上に鹿が立つてゐる。その鹿の影も、山の影も、入日のために門内へ這入つて大地に鮮かに影がうつつてゐる。その光景に見された句である。門は寺などの大きな山門であらう。奈良あたりで見さうな景色で、實にうつくしい。

北の窓日本海を塞ぎけり

子規

紅緑。 庵は北に窓があつて、そこから海が見える、海は即ち日本海である、冬構の爲に北窓を塞げば海も見えず、北風も吹付けぬ様になる。かゝる趣向を「日本海を塞ぎけり」と直ちに大膽に言うたのである。この言ひざまは和歌には

紅緑  
佐藤氏、名は  
治六、俳人、  
小説家。

古占

無論未曾有の事で、漢詩には稀に見る所であるが、俳句獨占  
ごいうて宜しいのである。北窓を塞ぐは冬の季になつて  
ある。

沙彌律師ころりくご衾かな 蕪村

紅緑。大廣間に沙彌だの律師だのが衾にくるまつて、彼  
處にも此處にも、ころりく寝ころんでゐる趣である。沙彌  
だの律師だのこいふものであるだけに、ころりくが餘程  
よく響いてゐる。この感は二人や三人では面白くない、多  
人數が大廣間でなくてはならぬ。沙彌律師は多人數を意  
味してゐる。

八 武士道

山路愛山

山路愛山  
名は彌吉、東  
京の人、評論  
家、大正五年  
歿、年五十二  
神護景雲  
稱徳天皇の御  
代、約一五  
〇年前。

神護景雲三年、朝廷警衛のため東人を召させ給ひし時の  
詔に、「東人は、常に『額に箭は立つとも、背には立てじ。』ごいひ  
て、君を一心に護るものぞ。」ごあり。東國は蝦夷ご境を接し  
て、民族の生存競争劇しく、戦争なども多かりしゆゑ、自ら健  
氣なる風をも養成したるならん。蝦夷の叛亂聞えずなり  
し後も、天慶以來、幾度か干戈動き、大名小名の私闘も亦少か  
らず。人氣自ら上國に異なり。かくて武士道ごいふもの  
もこの間に成長したり。

武士道ごは如何なるものぞや。一定の釋義を下すはむ  
づかしき事なれども、まづは武士の間に行はれたる面目律

石橋山

神奈川県小田原町の西方にある山、治承四年源頼朝大庭景親と此處に戦ひて敗る。

大庭

大庭景親。

使の殿上人  
藤原教長を指す。

ごも謂ふべきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は、臆病といふ事なり。頼朝は石橋山の厄難の時、日頃警の中に隠しおきたる観音の像を取出し、我が首、若し大庭等の手に渡らん時、警中に此の本尊のあるを見れば、源氏の大将の所爲に似ずとて嘲らるべし。それが口惜しければかくは取出し奉るものなり。と云へり。崇徳上皇、爲義を白河殿に召させ給ひし時、爲義、昨夜の凶夢を陳べて、御味方たるべき仰、辭退せんごしたるに、使の殿上人、武將の身ごして、夢見、物忌などは餘りに後れたる沙汰なり。といはれしかば、爲義、實にも。とて參殿に及びたり。

宗旨も信仰も武士に取つては日常の事なり。一旦非常

義平

源義朝の長子、平治元年（約七七〇年）前、約七七〇年二十、歿。

疵

侍程の者  
長谷部信連、平宗盛に、仁王の御在所を詰問せられし時、答へし。

に臨んでは、唯何事も惑はず突進するが、武士道の極意なり。されば保元の亂に、重盛は、勅命を蒙つて罷り向ひたる者が、敵陣強しとて引返すべきやうやある。といきまき、平治の亂に、義朝は義平の敗軍を見て、義平が河より西へ引きつるは、家の疵とおぼゆるぞ。今は何をか期すべき、討死せんのみ。と云ひて敵陣に馳突したり。臆病は弓矢の疵となるべきものなれば、寧ろ死すごも卑怯の振舞すべからずごは、武士道の第一義にして、神護景雲の詔に、額に箭は立つごも、背には立てじ。とあるものと同意なり。如何なる場合にも、逃げたりなど云はれんは口惜し。侍程の者が一度申さじご思ひ切りしごを、たごひ拷問せられたればごて申すべきや

殲盡

源氏に二人の主  
保元の亂に崇徳上皇に關する源親治が平基盛に云へる言

うなし。云ふがごとく、何事も思ひ切つて、惡びれぬを武士の魂とす。次に、其の頃の武士道にて宗と重んじたるは、志の專一なることなり。尤も、大名は草の靡き。といふ諺は其の頃よりあり。強さうなる方に荷擔して、所領安堵を求むるは一般の習なりしかども、さりて輿論はかく意氣地なきを善しとせしには非ず。主従の義を重んじ、志を主家に盡すを以て眞の武士の面目とし、殊に主家の盛衰に従つて向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に従ふ武士は、源氏に二人の主取ることなければ、宣旨なりとて、えこそ内裏へは參るまじけれ。云ひしものもあり。源氏の習、心

源氏の習  
源義朝の言。

凡そ武士には  
義平の言。

忠盛の家の  
子。

平宗清  
平頼盛の從士。

がはりやあるべき。とて肩を怒らし、ものもあり。「凡そ武士には二心を恥とす。殊に源氏の習は左様に候。と力みしものもあり。平家に從ふ武士も、忠盛の家の子には、主君若し辱しめられたらんには、えこそ遠慮はすまじけれ。必ず殿上までも斬り入らん。と決心したるものもあり。平宗清は頼朝の恩人にて、頼朝より關東に來らば善く扶持せん。と言送りたれども、平家零落の後頼朝に參向する一條、尤も恥ぢ存じ候。と云ひ、直ちに屋島の内府に參り、運命を主家と共にしたたり。齋藤別當實盛は、吉についてあなたへ參り、こなたへ參らんは見苦し。今は源氏の世盛となりたりとも、我は平家の味方となりて討死せん。とて、黒く染めたる白髮首

を木曾義仲の士に取らせたり。

病身ながら  
源頼朝の臣、  
加藤景康の  
語。

吾妻鏡

鎌倉幕府の日  
記。  
事あらば  
源義朝の言。

腸腹

かく臆病を惡み、主人に忠志の專一ならんことを宗としたる武士道が、其の結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東國武士が平家を西海に討ちし時、病身ながら天下の重事なり。坐視すべきに非ず。こても死ぬる身ならば戦場に死なん。こて出陣したる者のこことは、吾妻鏡にも見えたり。「事あらば眞先かけて命を主君に奉らん。弓矢執る身は、死すべき處を遁れぬれば、中々最期の恥あるなり。こて腹搔切つて死したるは、其の頃の武士の習なれば、義朝も「合戦の場に罷出でて何ぞ生命を存せん。」といへり。されば

池禪尼  
平清盛の繼  
母。

躬射

頼朝が十四歳にして父撃たるを聞きながら、自害をもせず、池禪尼にすがりて、かひなき生命を助かりしを、時の人は善くも言はざりしなり。  
此の外、其の頃の武士道にて殊に著しき一箇條は、人々互に功名を競ひたることなり。爲朝が白河殿にて、我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬやうに、たゞ一人いかにも強からん方へ差向け給へ。敵たこひ千騎もあり、萬騎もありとも、一方は射拂はんずるなり。こ廣言したるは、最も善く武士の氣習を言ひあらはしたるものにて、佐々木・梶原の宇治川先陣なども其の一例なり。  
但し弓矢の道と云ひ、武士の道と云ふもの、畢竟自然に生

恨限

じたる武士の面目律にて、多くは無意識の間に發達したるものなれば、此處までが武士道、此處までが武士道に非ず、明かに區別を立て得べきものに非ず。さりて其の面目律の制裁は、頼朝時代にも中々嚴重にして、武士道に外れたるものは、武士の間には生きて居られぬ程なりき。たとへば、平治の亂に源氏の士、藤原信賴を見限り、此の殿は、人に頼を打たれて返事をだにしたまはねば、侍の主には叶ひ難し。云ひしが如く、大將にして武士道の心得なければ、士卒附かず、侍にして名を惜しまず、卑怯の振舞あらば、武士の間に齒せられざりき。而して此の武士道は東國に盛にして、都には流行せず。都は柔弱者の寄合なりしが故に、天下の

會會

島津齊彬  
鹿兒島藩主、  
安政五年(約  
七〇年前)歿、  
年五十。

勢つひに上軽く下重くなりて、日本未曾有の大改革はなりたるなり。さりながら東國の武士が天下の主人となりたるは、獨り武士道の盛なりしが爲に非ず。保元以來、都に兵事多く、京洛の客往々四方に散じ、天下經營の知識に東國の武力を合併したるが故なり。近き世の薩摩の事も之に似たり。薩藩は武道の盛なる處にして、百二都城の健兒は勇氣に於て天下無比なりしかども、それだけにては天下に功を立つることもならざりしに、島津齊彬の祖父重豪、隱居して榮翁と稱せし人、薩摩の邊土にて武士の片意地なることを憂へ、天下の形勢をも知らしめんとし、勉めて上國の風を移し、よ

北條 四郎時政。  
 三浦 大介義明。  
 千葉 常胤。  
 小山 小四郎朝政。  
 大江廣元 公文所別當。  
 三好康信 問注所執事。

り薩藩固有の武士氣質と上國の知識とは此に相合して、薩人始めて眼を天下の形勢に開くに至れるなり。東國の強きのみにては、なほ天下を圖り難し。頼朝は北條三浦千葉小山など云ふ東國武士の力を假りたるに共に、大江廣元三好康信など云ふ京洛の客を愛し、其の經綸の知識を用ひたるなり。武士道も開化せざれば唯強きのみ。天下の形勢を辨へ知る知識と武士道との二味が調合して、始めて役に立ちしなり。(愛山文集)

武士は相身互。

一合取つても武士は武士。一

武士に二言なし。

討つも討たるも武士の習。

武士は食はねど高楊枝。

### 九 乃木將軍

森 鷗 外

森鷗外 名は林太郎、岡山縣の人、文學博士、大正十一年歿、六十一。

一

つはものゝ

武勇なきには あらねども、

眞鐵なす

ベトンに投ぐる 人の肉。

往く者は

生きて還らぬ 強襲の

鋒を

しばし轉じて、 右手のかた、

岡上なる

標の高さ 二零三、

巔の

二つ聳ゆる 石山に

たえぐの

望のいとを 懸けてこそ、

きのふけふ

軍の主力を 向けてしか。

二零三 二百三高地、標高二百三米、突、又爾靈山。



霜月 明治三十七年  
高崎山 高崎聯隊にて占領したるを以てかく名づく

柳樹房 旅順口の東北、攻圍軍總司令部の所在地  
曲家屯 二〇三高地の北、双島灣の東

二

霜月の	三十日の	夕まぐれ、
將軍は	高崎山の	師團より
たゞ一騎、	柳樹房なる	本營に
歸らんと、	曲家屯をぞ	過ぎたまふ。
ほの暗き	道のほとりを	見たまへば、
身うち皆	血に塗れたる	卒ありて、
そびらには、	はやこときれし	將校の
亡骸を	かきのせてこそ	立てりけれ。

三

「汝は誰ぞ。」	そを何處にか	負ひてゆく。」
「聞こし召せ、	背負ひ奉るは	奴わが

勝典 乃木將軍の長子、陸軍歩兵大尉、明治三十七年五月二十六年戦死  
保典 乃木將軍の次子、陸軍歩兵少尉、明治三十七年十一月三十日高地にて戦死

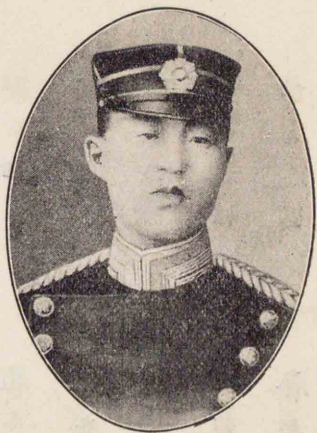
四

主と頼む	乃木將軍の	愛兒なり。
年老いし	將軍の家の	二人子、
そのひとり	勝典ぬしは	いちはやく
南山に	うたれ給ひて、	残れるは
かとうとの	保典のぬし	ひとりのみ。
背負へるは	その一人子の	亡骸ぞ。

四

父君は	心をしく、	我が主をも
隊附の	まゝにあらせて、	「討死の
身の果は	おのれと三人、	葬をば
ひと時に	營め」と宣り	給ひしを、
人々の	強ひて計らひ	つるにより、

友安旅團  
陸軍少將友安  
治延の引率せ  
る旅團



乃木勝典

さいつ頃

友安旅團の

副官に

職かはり、まだ程經ぬに、

この朝開、あへなくも

空しき骸となりましぬ。

五

果てまし、處は高地

二零三。目鏡もて

敵の備を望みます

うら若き額のたゞ中

打ちぬかれ、ひと言を

のたまはん、ひまもなく

うせたまふ。



乃木保典

持口の

南の峰に

この村  
曲家屯。

その骸を

ありと聞く

くるほしき

六

かくいふを

將軍は、

鞭あげて

面ざしは

目ざとくも

さむ空に

更闌けて、

睫毛だに

奴背負ひて、

野戦病院

心からにや

駒をとめて

病院の旗

「彼方にこそ」と

たそがれ時に

雲の絶間ゆ

まだ輝かぬ

友なる星に、

動かざりき」と

この村に

たづぬれど、

たづねえず。」

聞きましし

ある方を、

さし給ふ。

見えねども、

覗ひし

冬の星、

「將軍の

語りけり。(うた日記)

乃木大將は實に楠公以後の第一人なり。彼は人たるより寧ろ神なり。彼が旅順を攻撃するや、自己の子息をして最も危険なる、最も困難なる方面に向はしめたり。彼は之が爲にその子を失ひたり。更に彼は今一人の子を同じ方面に向はしめ、同じく死せしめたり。彼はその子を愛せざるにあらず。他人の子弟が無數に戦死するに、我ひとり我が子を惜しみては、我が道徳的責任に反すとの高潔なる念慮に驅られたるなり。時の父兄は感奮して、俗謡を歌うて曰へり、

一人息子と泣いては濟まぬ二人なくした方もある  
 即ち彼が子息二人を失ひたる爲に、國民はたゞ一人の子を戦死せしむることを悲しまざりしなり。

(楠公以後第一人―黒岩周六)

### 一〇 スポーツの境地 土岐善麿

巴里のオリムピック大會に出場した世界的選手の中、朝日新聞社が特に遙々此の極東へ迎へて來た四人の大選手と、我が日本の選手等との競技が、秋晴の明治神宮外苑に催された。スタンド

を埋める觀衆三萬。

僕も、其の一人として、快い青空の下、廣々と芝生の柔かに枯れかけた競技場の片隅に腰を下した。第一日と第二日とつゞけて行つた。日和雲を透して射す日光の靜かな直射に逢つて、顔も皮膚もこんがりこ

焦げた。掌にさはつてみると、我が肌ながら快い觸覺を感じる。



土岐善麿

土岐善麿  
 號は哀果、東京市の人、歌人、新聞記者  
 四人の大選手  
 ノルトン(米) スベアロウ(米)、シヨルツ(米)、ミイラ(芬蘭)の四人。大正十三年十一月來朝  
 スタンド  
 Stand  
 觀覽場

杯杯

それと同時に、すぎ透るばかり心をも清められたやうに思はれる。如何にも胸一杯に青春の氣が溢れて来る。それを先づ喜ばずにはゐられない。

僕には、競技の一々に就いてさう専門的に知識がある譯ではない。唯、これに對しても相當の理解は有つてゐると思つてゐる。それよりも、スポーツマンシップ、その精神といふものを、何よりも感じるだけの素質と用意とを有つてゐること



明治神宮外苑運動場

スポーツマンシップ  
Sportsmanship  
競技道

世界記録  
四米二二  
一九二三年  
ホッ  
プ(諾威)

バア  
Baar  
横木



興味となり、教養ともなる。

スベアロウ君は、第二日に捧高跳で四米二二を突破して世界記録を破つた。併し其の破る迄の努力は、スタンドの一隅から眺めてゐても、一通りではなかつたことがよく窺知された。バアを先づ日本選手の跳び得る程度にして、それを幾度も跳んだ。それは

言つた方が適當かも知れない。今度態々日本へ迎へて來た四人の世界的選手(其のうちノルトン君は生憎足を挫いて出場しなかつたが)の人達が、銘々其の特技に向つて自己を發揮してゆく態度が、僕には競技以外、一種の

コンデション  
Condition.  
條件。

碌録録

樂々と跳べるのだ。バアを段々と高くする。四米七——それも難なく跳んだ。バアは又更に高められる。此の時、場内司令が高声電話で觀衆に傳へた所によるに、スペアロウ君は今日世界の新記録を作る積りで努力してゐるが、風位のコンデションが悪く、高く走る時風が横顔に當るので、ひどく困難してゐるといふ斷りの意味であつた。其の電話の高聲が廣々した場内にまだ漂つてゐる中に、スペアロウ君は棒を捧げて走つた。踏切つた棒は高々こ軽快なス君の體を宙に浮かせた瞬間、全身は巧にバアの障礙を越えて、白雲を踏むやうな姿をしつゝ、ス君は地上に落ちた。新記録——其の鮮かさは、滿場の拍手が幾時間つゞいても讚歎し盡し得まいと思はれた。ス君は一寸平氣らしく傍に立つたが、愈々審判から記録を破つた旨を語られると、急に芝生の上を驅出して、場内を踴躍した。本當に歡喜踴躍の、靜かな、併し底強い誇だ。觀衆は又同時に拍手を送つて一緒に得意になつた。

スタート  
Start.  
出發。



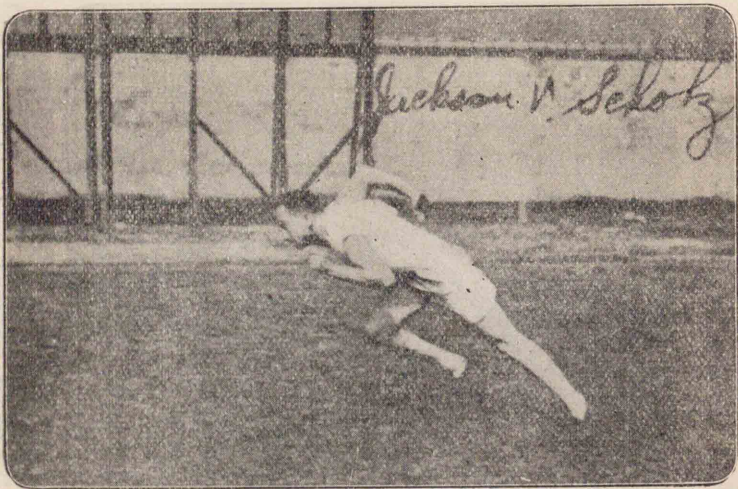
跳ぶぞ——と思ふ時は、もうスタートの時からごうも意氣込が違ふ。あぶない——

と思ふに、バアが僅かに手に觸れて、南無三べとばかり駄目になつてしまふ。スタートが悪ければ、途中でごう取返さうとしても追つ附かない。スペアロウ君がスタート

の一點に立つて、徐ろに精神を統一する態は、遠くスタンドから望んで慥かにそれと察せられる。「自分を持つ」といふ事は、何につけ

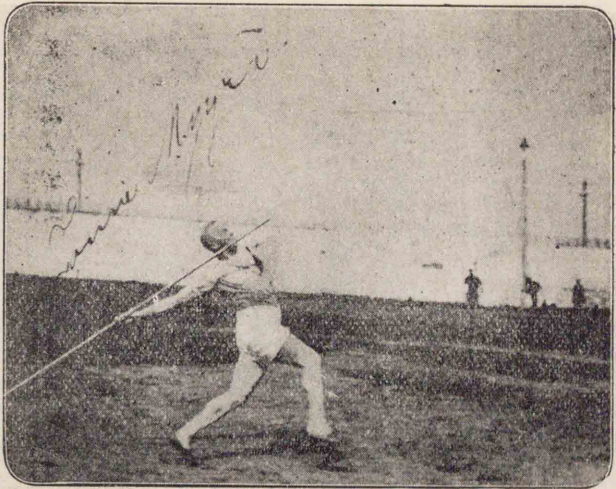
高木選手  
名は正征、大  
正十三年に百  
米十一秒の記  
録を作れり。  
Dash  
ダッシュ  
突進。

ても必要だ。かういふ道學者のやうにも聞えようが、シヨルツ君の百米・二百米を見るに、本當にそれがはつきりと解る。シヨルツ君は精悍豪壯その物のやうな體軀と容貌を有ち、如何にも自信のある走り振りをする。同じ競技に参加して日本の爲に頼もしい成績を挙げた高木選手などは、走路の三分の二あたりまではシヨルツ君と殆ど互角とも思はれたが、それは全くの素人眼で、シヨルツ君は後の三分の一で、きつと得意の間違ひのないダッシュをかける。高木君も此の時に至つて十分の努力はするが、シヨルツ君を追うては如何ともする事が出来ない。シヨルツ君は「記録」を持つてゐるのだ、即ち、自分を持つてゐるのだ。高木君に對しても、他のもつと世界的な選手に對しても、シヨルツ君は、この自分の記録を守つて、その科學的に鍛鍊した自分の走り振りを變へる事は無いに違ひない。他の速い遅いといふ事は、シヨルツ君に取つては、



無論シヨルツ君のみに限らない、苟くも選手といはれる程の者に取つては——直接の問題ではない。たゞ自分を走るだけだ、自分の持つ記録を走るだけなのだ、獨自の世界を走るだけだ。それ以外に何ものも有り得ない。今後シヨルツ君よりも、もつと優秀な世界的選手がないとは言へぬ。無論あらう。又現はれても來よう。しかも其の時には、シヨルツ君は自分の持つ記録を走るだけのことだ。選手は皆さうだらうと思はれ

殺利



六十五米七  
八  
一九二〇年の  
オリムピック  
記録。

るが、特にミイラ君の槍投の時の態度が、また僕を喜ばせる。それは、投げた——ごおもふ刹那、ミイラ君は實に平氣で、自分は今何をしたかといふ事も忘れたやうな顔をしてゐる事だ。投げてしまふと、悠々と自適の境地に立つてゐる。此の態度も僕等は學ばねばならぬ。全力を傾けて投げてしまへば、あとは審判員の審判に一任してしまふ。ミイラ君はオリムピック記録保持者で、六十五

米七八といふが、あの外苑ではそこ迄は行かなかつた。併しそれは問題でない。一度は屹度行つたのだ。これからも、一度ならず二度三度と行くに違ひない。もつと遠くまで行く時が来るかも知れない。それは審判員が計ればいゝことだ。——此の態度は何事にも學ぶべき所である。(朝の散歩)

一一 一本の足

厨川白村

厨川白村  
京都の人、名  
は辰夫、文學  
博士、大正十  
二年歿、四十  
六。

腫腫

私の體力は既に舊に復したのみか、初秋の頃になると、肉つきは發病前よりも更によくなつて、體重も増した。義足を付けて、街を闊歩するやうになると、健脚、人を驚かすに足るものがある。「えらい勢だなあ」と褒めるのだから、ひやかすのだから、分らぬことをいふ者がある。「何だか肥つたやうだが、腫れてゐるのではないか」など、ひやかす者もある。「馬鹿をいへ。君などは、この義足で蹴飛してやる」といばつ

俯俯

て見せる。死にかけた時は、何故あんなに腑甲斐ない、め、しい人間になつてゐたか、今更妻や友人に對しても恥かしい。全快して見るご、何だか強い仇敵にでも打勝つたやうな心持である。英氣今は十倍してゐる。これからは、どんなに勉強しても、もう大丈夫だらうと思ふ。何の本を讀んで見ても實に面白い。ちやんと頭に這入る。天下にまた恐ろしい憂はしいものも無いと思ふ。生の悦がしみと、味はれる。

世の中には、すべて報償ごいふ事がある。得るところあれば、失ふところあり、失ふところあれば、得るところがある。

胃胃

大隈さん  
大隈重信、佐賀縣の人、前後二回内閣總理大臣となつた。大正十一年、八月五日、薨。田之助  
三代目澤村田之助、明治三十四年歿、年三十一。

私は左脚を切斷してから、不思議にも年來の痼疾であつた胃病ごいふものを知らなくなつた。大抵の病氣は、足一本さへ切放てば治るものだごいひたい。若し一本切つてもまだ治らないやうな頑固な病氣なら、二本ごも切つてしまつたら治るだらう。

私が病院で左脚を切斷した時、いろくの事をいつて慰めてくれた人があつた。「脚を切るご、大隈さんのやうに口が達者になる、頭が良くなる、長生をする。」かういふ事を屢聞いた。しかし私自身は、明治初年の名優田之助の事ばかりを考へた。鉛毒のために、手も足も皆切つてしまつたこの女形は、終には胴體だけを竹籠の上に載せて、花道を曳かせ



枝技

て行つたさうだ。それで立派に振事を演じて、見物に喝采せられたさうだ。妙技神に入つては、手足を缺いて、なほ立派に役者が勤まつたのである。大隈さんもえらからうが僕は田之助において、更に大きな不可思議な力の發作を讚歎せずには居られなかつた。人はすべて根本の「生の力」をさへ失はなければ、肉體が受けた多少の損傷の如きは言ふに足らぬと、私は信じてゐる。

スフィンクス  
ス  
希臘の傳説に  
ある女性。

オイヂブス  
希臘神話中の  
人物。

「はじめは、四本の脚なごころ、二本になつて、遂には、三本になる。脚の數の少いほど強いものは何。これは、希臘のスフィンクスの謎だ。この謎を解き得ないものは、命を失つたのである。王オイヂブスは、見事に、人

坊防坊

だ」と答へた。赤ん坊の時は四つ足で匍ふ、老年になれば、二本足に杖を添へるから三本、中年の時は僅に二本で、これが一番強いといふのだ。しかし一本脚のことは、まだいつてない。若し脚の數が少いほど強いなら、一本脚は普通の人間以上に、更に強いものだらう。それこそ、スフィンクスの謎にも無い强者である。(印象記)

手八丁口八丁。

濡手で粟。

二の足を踏む。

膝とも談合。

足もごから鳥。

身は身で通る。

手の舞ひ足の踏むところを知らず。

三學期

一一 轡十文字

菊池 寛

菊池寛  
高松市の人、  
文學者、  
四人  
前野良澤。  
杉田玄白。  
中川淳庵。  
小杉玄適。  
平河町  
江戸麹町。

約の如く、その翌日を初とし、四人は平河町の良澤の家に  
月五六回づつ相會した。

良澤を除いた三人は、オランダ文字の二十五字さへも、最  
初は定かには覚えてゐなかつた。良澤は三人に蘭語の手  
ほどきをした。彼は道に長崎に留學したことがあるだけ  
に、多少の蘭語と章句語脈のことも少しは心得てゐたけれ  
ども、それも殆ど言ふに足りなかつた。一月ばかり經つこ、  
良澤が三人に教へることはもう何も残つてゐなかつた。

三人の手ほどきが濟むと、四人は始めて、ターヘルアナト  
ミアの書に向つた。が、開卷第一頁から、たゞ茫洋として、艦

派脈

ターヘルア  
ナトミア  
解剖圖譜の  
義、蘭醫キエ  
ルムスの著。

舵のない船が大洋に乗出したやうに、何處からも手の付け  
やうがなく、呆れに呆れて居る外はなかつた。が、二三枚め  
くつた所に、仰向けに伏した人體全象の圖があつた。彼等



前野良澤

は考へた。人體内景のことは知り  
がたいが、表部外象のことは、その名  
所も一々知つて居ることであるか  
ら、圖に於ける符號と説明の中の符  
號とを併せ考へることが一番取付

き易いことだと思つた。

彼等は、眉・口・唇・耳・腹・股・踵などに附いて居る符號を文章の  
中に探した。そして、眉・口・唇などの言葉を一つ一つ覺えて

洪哄

行つた。が、さうした單語だけは分つても、前後の文句は彼等の乏しい力では一向に解し兼ねた。一句一章を春の長い一日考へ明かしても、彷彿として明らめられないところが



白 玄 田 杉

屢あつた。四人が二日の間考へ抜いてやつと解いたのは、眉は目の上に生じたる毛なり。と云ふ一句だつたりした。四人は、そのたわいもない文句に哄笑しながらも、めいめい嬉し涙が眼の裡に浸んで来るのを感じないでは居られなかつた。

眉から目と下つて、鼻の所へ來た時に、四人は、鼻はフル

玄白  
杉田氏。

へッヘンドせしものなり。と云ふ一句に突當つて了つてゐた。無論、完全な辭書はなかつた。只、良澤が長崎から持歸つた小冊子に、フルヘッヘンドの譯註があつた。それは、木の枝を斷ちたる迹、その迹フルヘッヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵聚りてフルヘッヘンドをなす。と云ふ文句だつた。四人はその譯註を引合せても容易には解しかねた。「フルヘッヘンド！フルヘッヘンド！」四人は折々その言葉を口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へ抜いた。四人は目を見合せたまゝ、一語も交へずに考へ抜いた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにして、その膝頭を叩いた。「解せ申した、解せ申した。方々、かやうで御座る。

柏拍

木の枝を斷り申したる迹、癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土聚れば、これも堆くなるで御座らう。されば、鼻は面中に在りて、堆起せるもので御座れば、フルヘツヘンドは堆しと云ふここで御座らうぞ。」と云つた。四人は手を拍つて欣びあつた。玄白の眼には涙が光つた。彼の欣びは、連城の壁を獲たよりも勝つてゐた。が、シキ神經など云ふ言葉に至つては、ひご月考へ續けても解らなかつた。

彼等は、最初難解の言葉に接する毎に、丸に十文字を引いて印こした。それを轡十文字と呼んでゐた。初一年の間、どの頁にもどの頁にも轡十文字が無數に散在した。が、彼等の先驅者としての勇猛精進は、凡べてを征服しないでは

おかなかつた。一箇月六七回の定日を、怠なく守つた甲斐はあつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、章句の脈も明かになり、そして書中の轡十文字は殘少く搔消されてゐた。

先驅者としての苦闘は、やがて先驅者だけが知る欣びで酬いられてゐた。語句の末が明かになるに従つて、次第に蔗を噉ふが如く、その中に含まれた先人未知の眞理の甘味が彼等の心に浸みついてゐた。彼等は、邦人未到の學問の沃土に、彼等だけ足を踏入れ得る欣びで、會集の期日毎に、兒女子が祭見に行く心地で、夜の明けるのを待ちかねる程になつてゐた。(蘭學事始)

噉・啖

佐々醒雪

名は政一、文學博士、大正六年、年四十六、載戴

一三三 言葉の變遷

佐々醒雪

日本語は幸にして二千年近い記録を存してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。而も萬世一系の帝室を戴いた同一民族の間にもみ發達したので、今から約千年前に出來たといはれる「竹取物語」や「伊勢物語」を見ても、半分以上は今日も平生使用してゐる言語で出來てゐる。こんな國はいふまでもなく、世界に又こはない。一千年前即ち十世紀前といへば、今の歐洲列強國などは、皆全くの野蠻國であつた。かく久しい時代を経てゐるから、同じ語でも、その意味は頗る變化したものが多し。

例へば、甚だしく變遷したのは、「いへ」といふ言葉である。

變遷

肩屑

昔は「いへ」といふと、家族とか、家庭とかいふことで、随つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長、即ち戸主のことであつた。然るに今日「いへ」といふと、家屋即ち建築物のことで、「いへぬし」は借家の持主の義に用ひられてゐる。かゝる變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語が頻りに用ひられ始めてからも、同様の變化は認められる。例へば「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふことであるから、「紙屑買」が「御不用物は御座いませんか」と呼んで來る。然るに中古では、「不用なる者」といふと、「用ふるに堪へぬ鈍物か、痴呆者のこと」で、更に降つて武家時代に入ると、「爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた」などと記して

あつて、不用といふのは、悪戯者又は無法者の義である。鎌倉時代に「不用なもの御座いませんか。」と呼び歩いたら「悪戯者はないかな。」と呼びあるく鼠取薬と間違へられたであらう。

此等は未だ單なる變遷で、中にはその變遷の間に、語源の意義に對して奇怪なる矛盾を生ずることもある。漢方醫が廢れて薬を煎じることがなくなつても、薬罐といふ名は残つてゐたり、白馬と書いて「あをうま」と讀んだり、赤くなくとも、鹿末な本を赤本といつたり、黄色な表紙の草雙紙を青本ともいつたり、不思議な言葉を列擧すれば、際限もないが、就中不思議なのは「茶碗」や「さかな」である。

予予

麤(鹿末)

株抹

器(器)

日本でまだ立派な陶磁器の出來ぬころ、支那から渡つて來た上等の陶磁器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつた。然るに日本で硬い上等の物が澤山出來るやうになると、飯を食ふにも、番茶を飲むにも、陶磁器を用ひ始めた。そこで、飯食茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出來た。今日では珈琲茶碗とさへいつてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、飯を食ふのは、飯碗、珈琲を飲むのは、珈琲碗といひさうなものだが、さう理窟通りには行かぬ。言葉は又使つて居る中に段々下落するものである。例へば大工といふ語は、工藝家中の俊秀なものの尊稱で、多くの小工どもの頭領を呼ぶ名であつた。然るに今日では建

印卯叩

築事業にたづさはる者は、小屋掛の叩大工でも、やはり大工である。かの親方なども同様で、今日では一人の手下をも持たない男でも、印袴纏さへ着て居れば、即ち親方であり、頭領である。

又、迷信から來た變造語といふべきものもある。例へば海邊に生えてゐる「蘆あし」といふ草を「悪し」と聞えるといつて、わざと「葎むし」呼びかへたり、「四」の音を忌んで「よ」といつたり、「梨り」を「ありの實」「硯箱えんばう」を「あたり箱」「錫すん」を「あたりめ」といふ類が多少は行はれてゐる。古も、伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮様の御所では、髪のない僧侶のことを、わざと「髮長はつちやう」など、いつた例もある。

蘆(芦)

顯(頭)

かやうに同一の語が、例へば髮長はつちやうといつて髮のないことを顯すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、言葉の變化は窮極を知ることができないのである。

(醒雪遺稿)

一四 大日本國語辭典の序 芳賀矢一

十年一昔といふことを思ふと、上田、松井の二君が國語辭書の編纂に着手せられてからも、一昔はごくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晚餐會に招かれて打興じたのは、つい此の間のやうな氣もするが、其の頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今や其の第一卷

松井 東京高等師範  
學校教授、  
治學博士、  
松井簡文

國語辭書  
大日本國語辭  
典、上田松井  
兩博士著、大  
正四年第一卷  
發行、四卷、五  
千三百餘頁、  
萬語數二十餘

板版

がいよゝゝ出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに窮がない。此の一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や軍事や工業や貿易やの進歩發展の跡を見ても、其の間の十年は通常の十年ではなかつた。二君の編纂事業はかういふ中に徐々ご其の工程を進めて行つたのである。

鑛(礦)

鑛山から掘出されて選り分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬幾十萬といふ古語や新語は、幾百部幾千部

痒(癢)

邸内  
東京市小石川  
區關口駒井  
町

の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月二月三月四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾度か改まる。同じ仕事ははてしなく續く。傍から見れば抄の行かぬところは齒痒いやうで、何時方のつくここかご危まれる程であつた。編輯室は松井君の邸内の離れ家にあるが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つた事も幾度か分らぬ。二君の筆と頭腦は間斷なく此の間に活動して、取るものは取り、捨てるものは捨て、其の進捗は、遅いが、其の成果は確實であつた。かくて粒々積上げた砂子も遂には山を成す喩のやうに、編纂の

遅(遲)



板版

稍緒に就いた頃までには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾隻もなく進水式に浮び出たのであつた。

學者の仕事はちみである。目ざましく世人を驚かすやうなことはない。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども一たび其の室に入つて山成す材料を見上げるものは、何人も其の難事業たることを承認せずには居られぬ。又編纂者の決心と根氣を尊敬せずには居られぬ。さうしてそれが決して學者の閑事業ではなくして、實は國家的大事業であつた事に考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて國民教育

拮拮

抵抵

の根柢となる國語の調査整理が、現今に緊急であることはいふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國といはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に依らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狭い編纂室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が實は絶大な國家的事業であつたといふここに於て、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比へて鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大いに増加したのを祝する人は、之と同時に、數隻の巡洋艦で満足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し、歎美しなければならぬ。文物の整

齋齋齋

備するのは國家の誇であり、飾である。又精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民に取つての立派な強みになる。此の一大産物が堅忍不拔な二君の手に依つて成就せられたことは、友人たる余の言ひしらぬ喜悅を感じる所以である。此の十年は國語界に於ても、亦無意味な十年ではなかつたのである。學者の事業はいつも世間と没交渉のものではない。専心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、進歩して行く世間を一日も餘所に見て行くわけには行かぬ。十年一昔の間には、國語其のものの中にも絶えず變遷が行はれてゐる。

紛紛

それに注意するだけでも容易な事ではない。靜寂な編輯局は、紛糾した實社會と常に相往來して居るのである。幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に、其の背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。思ふに後世の人は、必ずこれを明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。余は二君の満足と喜悅を察知すると同時に、今かくと十餘年を待暮らした同友と共に、まづ二君の成業を祝して一大白を浮べようと思ふのである。

萩野由之

新編縣佐渡の  
人、文學博士、  
歴史家、大正  
十二年歿、年  
六十六。

一五 學徒に示す

萩野 由之

放效

譬譬譬

月はヒヂ、  
言(ことば)  
はタトヘ、  
土はカベ、  
人扁こそは  
ヒカゴトと  
知れ。

精深微妙の眞理を究むといふ高尚なる學問は言ふまでもなし、僅かに一技一藝の上手と言はれんだにも、その心を潜めず、放埒に明かし暮しては、事の成らんこと覺束なし。苟も師父の教を受け先輩の講説を聞く時に當りては、その放心を收めんこと最も肝要なるべし。若し空を渡る鴻鵠に心を馳せ門を過ぐる車馬に目を奪はれなば、心こゝにあらずして、視れども見えず、聽けども聞えざるべし、いかで學業の成るを望むべけん。何事も古人を學ぶといふは僻事なるべけれど、その善きものは擇びて師とすべきにこそ。今、古人勉學の一端を擧げて反省の助とせん。

山本勘助

名は晴幸、三  
河の人、永祿足  
年、川中島の戰  
に戦死す、約  
三六五年前、約  
年六十九。

勝頼

武田信玄の  
子。

天目山

山梨縣八代  
郡、天正十  
八年(約三五  
年前)に勝頼  
の死す。

戦國の頃、山本勘助晴幸とて、甲斐の武田の臣にて、軍略世にすぐれたる人ありき。嘗て衆人の中にて軍事の物語しけるに、その席に、小宮山助太郎、小山田八彌、秋山友市といふ三人の小兒ありしが、小宮山はうづくまりて謹聽し、八彌は笑語し、友市は度々座を立ちけり。勘助人に語りて曰く、助太郎は必ず事を濟すものならん。二人は必ずく用には立つまじきものなり。方々よくその行末を檢せられよ。こいひけり。後に武田氏衰へて、勝頼天目山に敗北せし時、果して二人は出奔し、助太郎は君の勸當蒙り居たりしかども、遂に殉死せり。世に小宮山内膳友信といふは、この助太郎が後の名なりとぞ。

天和 將軍綱吉の初世、約二五〇年前。  
北村季吟 近江の人、國學者、寶永二年前、約二二〇年歿、年八十。

恥(耻)

又天和の頃、北村季吟は歌連歌の上手にて、後に幕府に召出され、和學方となりて新に家を興しし近代の文學家なり。この人はじめ花の下の宗匠となり、精靈會の百韻しける席に、その子湖春、十四五歳ばかりなるが侍りけるに、つゝ立ちて厠に行かんごせり。季吟怒りて、やよ悴、汝連歌に身を入れて居垂れにしたりと人に言はれんは、道に於て恥にあらず。かゝる席にて中座せんごは、いみじきうつけ者ぞ。ごいなく誠めけりごいへり。  
いづれもその學に心を入れて他事なきごごかくの如くならざれば、世に勝れたる堪能にはなり難きを誠めたるなり。汝等苟も名を成さんご思はば、ごごに深く思を致すべ

伊藤東涯 名は長胤、元仁齋の長子。元文九年(約一七九〇年)前歿、年六十七。

きものぞ。伊藤東涯先生が道を學ぶものは孤軍大敵に臨み、單身重圍に陥りたらんが如く、一尺を進むごも一寸を退くごごなかれ。ごいはれしは、實に思慮ある言ごいふべし。  
(國文)

世には聰明絶倫の人ありて、一時に多くの人々の口々に訴ふるを聞き得、また手もて畫を作りながら、心には詩を思ひ得る人もなきには非ず。歴史中には往々かゝる人も見るごごあれご、實は八人藝ごいふものめきたる事をなし得たりごご。毫も尙むべきにあらず。俗人ごそ驚きて之を異ごはせめ、識者はいかで偉なりごせん。たまごく左手に圓を畫き、右手に方を畫くが如きごごを能くする人もなきにあらねご、事もご例外に屬すれば、常人の學んで達すべきに非ず。

(散亂心―幸田露伴)

千葉龜雄  
江東と號す、  
秋田縣の人、  
大阪毎日新聞  
記者。  
島田  
靜岡縣志太  
郡、大井川の  
東岸。  
金谷  
靜岡縣榛原  
郡、大井川の  
西岸。

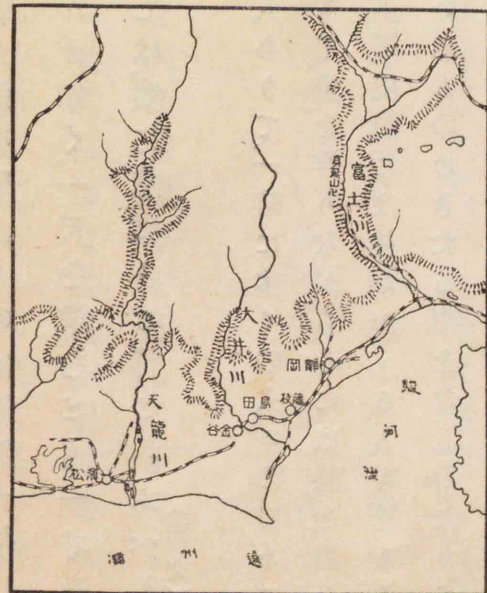
一六 冬枯の大井川

千葉龜雄

東海道島田の驛はこゝに盡きた。此の川一つ向うへ渡

れば、そこが直ぐ金谷の  
町だといふ。今、大井川  
の冬枯の堤に立つ。

飽くまではしやぎき  
つた冬の空は、底も知れ  
ぬ程凝つて蒼く、見るも  
寒げに、高く〜澄んで  
ゐる。白い雲が、さきど



大井川附近



東海道  
五橋  
之内  
金谷

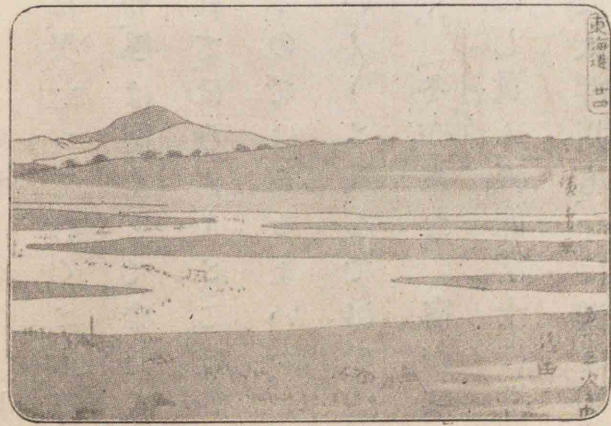
— (筆重廣) 越臺葦川井大 —

枯涸

きぼつちり浮んでは、又一たまりもなく吹流される。風の  
風いだ大海に、白い帆影が現れては、又迂つて行くとも思は  
れる。日は小春日のやうに暖いが、風は飽くまで冷たく骨  
を刺す。岸の水楊の葉は半ば枯れて、ほろ／＼とこぼれる。  
肩を窄めて、うつむいて泣いてゐるのではあるまいか。名  
も知らぬ小鳥が、矢のやうにひよい／＼と飛んで出ては、劈  
くやうな細い聲でヒ／＼と啼く。「冬が來た。宿が無く  
なつた。さ鳴くのかも知れぬ。名にし負ふ天龍富士に押並  
んで、東海道隨一の大河と呼ばれた大井川も、今は瀬は涸れ、  
水は落ちて、水は落ちて、廣さ何町といふ石ばかりの河原が、眼前に展開  
されて居る。見渡す河上も、河下もみな磧である。石とい

客容 治治

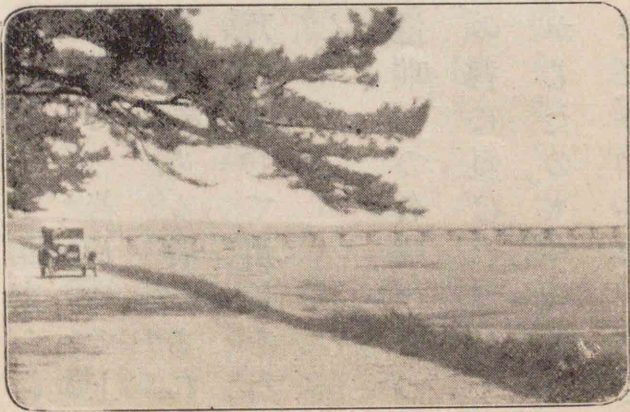
つても幾百年と無く激流に洗はれて握飯の様に圓くなつて、灰茶色に晒されて居る。其の灰茶色の石原の中を、幾つにも割つて白く動くは、大井川の流であらう。白い流水は、日光を浴びて、青く緑に閃めく小石を噛み、大石を噛んで、瀬枕立てて滔々たふやと流れて行く。小鳥の時たまに啼く聲が、他界からでも来るやうに響く外には、河の兩岸の此の眞晝を、寂として鍛冶屋の鈍音一つ響かない。若し夢に容あらば、此



川井大の音

閑閑

の静寂は即ち夢の容であらう。若し夢に聲あらば、此の流の聲は即ち夢の聲であらう。水は滔々たふやとして百年、二百年の夢を見て、夢の様に流れて居る。岸に立つ人亦恍として、何時しか二百年、三年の昔の夢を繰返してゐる。箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。何處もなく長閑な馬の鈴がちやらん／＼と鳴つて、空にも入れよ、地にも徹れよと清きよしい馬子唄の聲が夢に入る。



川井大の今

湖・迦・泝

あゝ、富士といはず、天龍といはず、一葉の船、一本の棹で越されぬ河流は何處にあらうか。獨り大井川は、船で越すことを許されなかつた。徳川幕府が江戸に移つて關東を經營するに共に、大井川を東海一の要害と見た。若し船で上流に溯り、下流に下りて、此の河の形勢を見極める者があれば、天下の守は悉くこれから破れる。乃ち令して川越を行はせた。土地の歴史に精しい人は説く。

かくて裸一貫の荒くれ者は、東海道唯一の名物となつた。さしも鬼を取挫ぐ荒くれ武士も、其の背に負はれては、ぐうの音も出ず、島田・金谷の全盛目を驚かしたのも、今は昔だ。寢てこそ渡れ大井川、其の大井川の岸に、今初冬の日光を滿

牙・互

身に浴びて立てば、盡きせぬ流の聲も無意味に聞く事は出来ぬ。石に碎けて咽ぶのは、「昔の全盛を聞け。」と語るのではないか。今の零落に泣いて居るのではないか。自分は昨夜、日が暮れて島田の驛に降りた。降りる人僅かに一人二人、狭いプラットホームを潜つて驛を出ても、人力車一つあるではない。風は寒い、満天の星の光さへ牙えて、ぶるぶる震へて居る。舊式の懸行燈の火影をたよりに、鞆を抱へて一夜の宿を探した自分は、今更に島田の宿の衰頽を泣かざるを得なかつた。

○  
坂は照るく、鈴鹿は曇るあひの土山あめがふる。



西は追分東は關所淺間山から日がのぼる。  
沖のくらしいのに白帆が見えるあれは紀の國蜜柑舟。(俚謠)

中川霞城

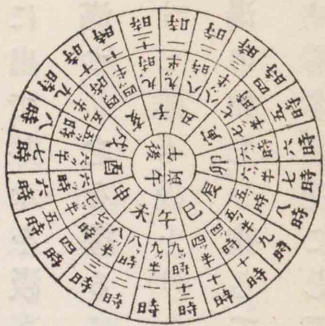
名は重盛、又  
四明と號す。  
俳人、新聞記  
者。

### 一七 寒稽古

中川霞城

古來右文左武とは云ふものゝ、封建時代の少年は、主として武藝を講習し、弓馬槍劍砲術調練、實にこれ當時名譽の焦點にて、就中、擊劍は、殆ど學ばざる少年なく、従つて當時最大の勢力を有せり。されば、茲にまづ、其の寒稽古に、幾多の少年が、相競うて場に上りし景況を物語らん。

尋常の日に於ては、大抵始業の時刻を朝五つ時とし、終業の時刻を九つとしたれども、寒稽古と稱するは、多くは曉天



古今時分圖

七つ時より始め、五つ時に至つて止むを古例とし、三十日乃至五十日の間、氣候の最も酷寒なる時期を以てす。既に其の期に近づきて、何日より寒稽古なりこの揭示を見るや、少年は手を拍つて相喜び、一日も缺席すまじと自ら誓ひしは、蓋し他に故あるにあらず。當時人皆信じたり、寒稽古に出精すれば、藝道は著しく上達するものなり。かゝる名譽上の一大刺激あるよりして、彼等は、銳意熱心、たゞ人後に落ちざらんことをこれ思ひ、父母も亦獎勵至らざるなかりしなり。是に於て、彼等は、寢に就くに當つて、稽古道具を取り揃へて之を

睡睡 俟 矣

近く枕上に置き、父母に向ひて、城鼓四更を報せば、諱ふ速かに呼起し給へ。云ひ、晝の疲に、忽ち熟睡す。雖も、精神充滿すれば、敢へて他人に呼起さるゝを俟たず、時刻を思ふ頃には、獨り自ら眼の開くなり。

夢醒めて、たま／＼城頭に聞ゆる鼓聲を數ふれば、正にこれ八つ時なり。蹶起して衣服を着、破袴を穿ち、走りて裏口に出で、井水を汲まん。すれば、釣瓶の繩は堅く凍りて、氷針滿つ。之を握るに、指は忽ち墜つる心地して、覺えず手を呵す。雖も、汲上げたる水は、蒸發氣濛々として立ち騰り、殆ど湯の如し。掬して口を嗽ぎ、面を洗へば、湯の如きもの、湯にあらず。既にして家に入れば、父母も亦夢を醒まして、寒威

嗽 漱

の骨に徹するを顧みず、何くれと世話し給ふは、いさ有り難きここにぞある。

寒塞 郎朗

斯くて、兩刀を帶し、稽古道具を擔ひ、父母に告げて門を出づれば、或は寒月高く、霜氣凜冽たる夜あり、或は北風怒號して、野狐の頻りに叫ぶ夜あり、或は冷霧四塞して、咫尺を辨ぜざる夜あり、或は積雪深くして、道に迷ふ夜あり。或時は提灯忽ち消えて、路傍の樹影、大入道かと思はれ、或時は履聲の反響、鬼ありて、後へに來るかと思はしまる。或は詩を朗吟して、勇を示し、或は大聲叱咤し、或は刀の櫛を握りて、睥睨するなど、若し、傍に人ありて、之を觀たらんには、をかしきこと限な

擔膽

明朋

かるべしと雖も、少年の常として、かゝる瞬間には、種々耳にしたる怪異の譚を憶ひ起し、自ら妄想を畫きて、物凄く思ふなり。況して、當時狐狸妖怪の事は、社會の勢力ある迷信なりしをや。武家屋敷の常として、彼處の森の中には老狐の窟あり、此處の橋の下には古狸の巢ありなど言ひ傳へしなり。されば、少年は、此の如き夜行も、膽力練磨の修行とし、好んで、狸橋狐畔を過ぎ、人に誇る談柄となしたり。亦甚だ愛すべき振舞と謂ふべし。

既にして、師範家もしくは城中の擊劍場に到る。到りて見れば、朋友の、既に我に先だちて來れるもあり。又未だ來らざるもあり。中央には高く燈を釣り上げて場中を照し

濡襦襦

幕府講武所  
徳川幕府の  
末、旗本の士  
に武術を講習  
せしめし所

休憩所には二三の大火鉢あり。或は炭火を以てし、或は焚火を以てし、暖を取るに供せり。三々五々次第に出席の人数を加ふ。皆火鉢の邊に群がりて、或は汗に濡れたる稽古襦袢を乾かし、或は拳に貼せる松脂膏藥を焙り、或は新竹刀を傳へて、輕重を品するあり、古小手の使ひよくて棄て難きを説く者あり。斯くて、各自に衣を着替へ、用意整へば、少年は皆兄弟子の前に出で、一禮して起つて試合を爲す。

「や」と呼び、「う」と呼び、「お面」、「お小手」の聲高く、竹刀相撃ちて憂々、火花を散らし、鏑を削り、朱胴の丸籠、黒胴の破軍星、金色と銀色と相映じ、面の紐の赤きあり、白きあり。若し幕府講武所の例を以て之を説かば、白はこれ師範役にて、赤はこ



宮本  
宮本武藏、播磨の人、劍客。二刀流の祖。正保二年(約一六四〇年)歿、年六十四。

スバルタ  
古代ギリシヤのラコニヤ州の首府、尙武的の教育により市民専ら武事に力めたり。

れ教授方、白こ紺この組紐は、これ即ち壯年血氣の世話心得にて、皆名譽多き勳章と謂ふも不可なし。幾番の試合、幾回の勝負、龍躍り、虎吼え、兩刀を振ふ宮本あれば、小太刀を執る牛若あり。或は大手をひろげて、むずこ組み伏するあり、或は足を搦まれつゝ、仰向に倒るゝあり。ほのくゝこ夜の明くるころには、全身皆汗に染み、喉渴して雪を咬むあれば、聲を嗄らして水を飲むあり。小手短く、臂破れて、紅血を流すあれば、刀太く、胸を突かれて、紫痕の鮮かなるあり。こゝに至つて、また寒を覺えず、寒中なほ團扇を揮ふ者あり。亦壯快ならずや。彼の古スバルタの少年も、若し此の景況を觀ば、或は慚死するならん。

恥(耻)

擊劍場に於ける寒稽古の一斑は、略かくの如し。槍術弓術に於けるも、亦相似たるもの多し。要するに、之を、今日明治の少年が、深奥なる學藝を修め、幽玄なる眞理を講ずる精神的辛苦の多きに比すべからず。雖も、彼等少年の、氣力の雄壯快活なる、大いに今の少年に勝るものあるのみならず、長上を敬し、朋友に厚く、信義を重んじ、廉恥の心深かりしは、時世の然らしめし所こはいへ、今日多く見る能はざる美風なりき。現代の少年たる者、亦思はざるべからざるなり。

○ 兩刀づかひ 鎬を削る

眞劍 切羽つまる

籠手しらべ (轉義)

一八 土の歡喜

河井醉茗

これがどうして消えるだらうと思はれた雪が  
 いつの間にか音もなく  
 大地の彼方に消えて行つた  
 あんなにひし〜と  
 きびしく築いた霜柱も  
 何處へか持つて行かれた  
 白くから〜に乾いてゐた街道も  
 茶色にうつぶしてゐた原野も  
 氣がゆるんだやうに  
 ゆるやかに胸をくつろげて  
 その間から

繙繚のやうな草や木の芽が  
 長い間こらへてゐた息をホツと吐く  
 やがてはのび〜とした土の歡喜が  
 太陽に向つて  
 地上一面に  
 あを〜と舞ひあがるであらう (醉茗詩集)

徳富蘇峰  
 名は猪一郎、  
 熊本の人、評  
 論家

磨摩

一九 要談と閑話

徳富蘇峰

御免！ 鞠躬如こして鬨を踰え來る。上る。坐す。叩  
 頭す。天氣の挨拶をなす。茶を飲む。煙草を喫す。一服  
 又一服。手を以て座右の火鉢を摩す。或は火箸を取りて



徳富猪一評

盡くるが如くにして際なし。彼は何の爲に來りしか。漠  
ごして知るべからず。

時刻は遠慮なく移れども、彼は遠慮なく長坐す。話頭絶  
えんごすれば、忽然ごして前に返る。環の端なきが如し。  
煙草を喫し、また茶を飲む。忽々焉たり。閑々乎たり。彼  
は何の爲に來りしか。漠ごして知るべからず。

忽々焉  
閑々乎

柳下惠  
支那周代の賢  
者

國民子  
國民新聞記  
者、即ち筆者  
自身をいふ

主人の堪忍袋も漸次に膨脹し來れり。彼は何ごなくい  
らだちて見えぬ。然れども客は主人の顔色に關するごこ  
ろなし。汝は汝たり、我は我たり。客は果して柳下惠の徒  
か。流石の主人も最早我を折れり。彼の身は座にありて  
客に對すれども、心は八方に飛べり。彼は器械的に坐する  
のみ、客の言は彼の耳邊を超えて空に入るのみ。

忽ち主人の耳を貫くものあり。曰く、時に少々御願がご  
ざりまして……」。嗟呼、客は果して金借りに來りしなり。

國民子曰く、閑話は閑なるを厭はず、要談は要なるを要す。  
清風明月の夜、會心の友相會して會心の談をなす。たゞ東  
方の明け易きを憾むのみ。然れども、閑話は要談にあらず

要談は閑話にあらず。二者豈混同すべきものならんや。

(寸鐵集)

いろ／＼な意味に於て面白い文である。就中、誰もが第一に感ずる面白味は、初の二三段で、故らに語句を、ぼつ／＼と短く断つて、金借りに來た男の、ちよこ／＼した舉動を、目に見るやうに書いた點である。こゝに語句の斷續の意匠がある。若し之を次のやうにしたら、どうであらう。

〔御免〕と言ひつゝ、鞠躬如として闕を踰え來り、上り、坐し、叩頭し、天氣の挨拶をなし、茶を飲み、烟草を喫すると一服又一服し、手を以て座右の火鉢を摩し、或は火箸を取りて灰に畫くを見れば、彼は何の爲に來りしか、漠として知るべからず。徐々として口を開き、話頭一轉又一轉し、村内最近の時事より各種の評判に入り、盡くるが如くにして際なきを見れば、彼は何の爲に來りしか、漠として知るべからず。(中略)

忽ち主人の耳を貫くものありて曰く、時に少々御願がござりました……「嗟、客は果して金借りに來りしなり。」

## 二〇 道話一篇

柴田鳩翁

### 一 南京の壺

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役の人々、一同に座に就きますると、さまざまの馳走がある。時に、かの年寄は、酒を聞いては、笹の露にも酔ふ程の下戸ぢや。座中を廻る杯の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちよ、御菓子なりとも御取りくだされい。」と、南京の古染附けの壺に大りんの金米糖を入れて年寄の前へ持つて來る。座中も「これは好いお心附、

柴田鳩翁  
通稱は謙藏、  
京都の人、保心  
學者、天保十  
年(約九〇年)  
七(前)歿、年五  
十

景清  
平氏の侍大  
將、悪七兵衛  
景清  
美保谷  
源氏の士、美  
保谷十郎國  
俊

ひらにお菓子を召しあがられい。とすゝめる。年寄もわるうはなし、然らば頂戴を致しませう。と、壺をひきあげ、手首を突込みしなに少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるか、色々にこじまはして見ても、ひつばつて見ても抜けず、まご／＼して居らるゝと、傍から見つけて、「どうなされましたぞ。」いや手が少しつまりまして思ふやうに抜けませぬ。と眞顔になつていはるゝ。「それは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向うへまはつて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引合ふ有様、景清と美保谷が鉦曳をするやうなと、座中が一同にごつと笑へど、年寄はなか／＼笑はず、泣顔になつて、「どうも痛んで抜けませぬ。」といふ。さあ、これから大騒になり、「醫者ごのを呼んで來い。接骨ではいくまいか。」と、酒宴

司馬溫公  
名は光、宋代  
の大儒

の興も醒めはてました。

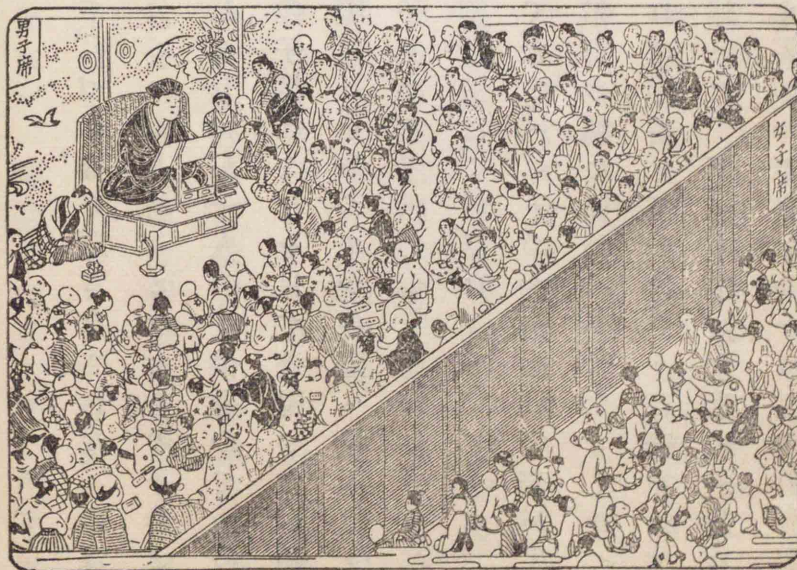
時に五人組が一人進み出て、「いづれもお騒ぎなされな。我等承つたことがある。昔、司馬溫公といふ人、幼きとき、大勢の子供と共に大きな壺のほごりに遊びましたが、一人の子供、過つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、かの壺へ投附けましたれば、壺は割れて、はまつた子供は不思議に命を助かりました。或人の話ぢや。今お年寄の御難澁は、この話によつて似てある。いざや、我等が司馬溫公となつて、たこへばその古染附けの壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。」と、しかつべらしく煙管を提げ、向うへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、只一打に打碎いた。何が、座中は金米糖が散らかつて雪を降らした様になる。と、やれ、お年寄お助かりなされたか。」と



糠糖

其の手を見れば、抜けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯つかんで居られたと申すことぢや。何ごをかしい話ではござりませぬか。

つかんだものを放しさへすれば自由自在に手は抜けたものを、一度つかんだら首がちぎれても離すまいと片意地なうまれつき、それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば金銭の事のやうなれどつかむものは



心學道話の光景

柳枯

鳩翁道話

柴田鳩翁の心學道話を、その子武修の筆記したる書。續々篇あわせて九卷あり。

これはかりではない。腕前のあるのをつかみ賢いをつかみ、負けをしみをつかみ、家柄をつかみ、身代のよいのをつかんで離すまいとかがつぎ歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事もならず、慎も出来ず、せん方なさに癪氣抑へたり、顔しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりさては氣の毒なものでござります。壺割つて仕舞うてからは、何いうても詮ない事ぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。(鳩翁道話)

二 談義僧

或山家より京の町へ談義僧を招待に参りました。折節その日は雨ふりで道もわるく、駕籠をもつて迎に來ました。和尚もやがて用意して駕籠に打乗り、京を離れて三四里許と思ふ所で、どうした事か駕籠の底が抜けました。いたはしや、和尚は袈裟も衣も泥まぶれになられた。迎の人足も氣の毒がり、そこら駈廻つて、繩き

晝晝

れ多く拾つて來て、やうく、と駕籠をからげ、さて和尚に再びお乗りなされといふ。和尚も氣味わるけれど、雨は強し、袈裟は汚れる、晝中にあるくも外聞悪く、不承々々駕籠に乗る時、「これ駕籠の衆も、う底は抜けはすまいか」「いえ、氣づかひはござりませぬ。」「こいふゆゑ、乗移ると、鼻上げるこの拍子で、また底がめきく、こいふ。和尚大きに肝を潰し、「これではなか、安心がならぬ。御苦勞ながら合羽の上から今一度、丈夫に繩がらみにして下され。」「こいはれる。人足も尤もに思ひ、また繩ぎれを拾ひ集め、合羽の上を豎横十文字にからげ、「是であやまちはござるまい。」「道を急いで或村を通りかゝつた。

豎(豎)

折節此の村に法談があつた見え、參詣の老若、道場の歸り足に此の駕籠を見つけて、肩衣をかけたる親仁が、傍の媼にいふには、「なんと皆の衆、今日の御勸化は有難い事ではござらぬか。いかさま

咳欬

無常迅速の世の中、生者必滅、會者定離のこころわり、何時如來様のお迎があらうやら知れぬが人の身の上。あれ、あの駕籠を見さつしやれ。ごうでも京へ奉公に行た人が死んだと見えて、死骸を在所へつれていぬると見える。さてもはかないものぢやござらぬか。こいふ聲を、駕籠に乗りたる和尚聞きつけ、「さては我を死人と心得たか。いまくしい。」「と、わざと駕籠の中で咳ばらひすると、かの老人は此の咳ばらひに驚き、急に傍へ飛びのき、小聲になりて、「死人ぢやと思つたら、ごうでも科人ぢやさうな。めつたに側へ寄るまいぞ。」「こいふ。和尚愈、腹を立て、今はたまりかねて、駕籠の中でぢだんだ踏み、大聲あげて、「科人ではおらない。」「こいふ。其の聲にまたびつくりして、「さては科人ではなうて、ごうでも氣ちがひぢやさうな。」「こいはれた。

是が面白い話ぢや。何分駕籠を外から繩がらみにしたもののゆ

顧省

徳富蘆花  
名は健次郎、  
熊本縣の人、  
學者、昭和二  
年歿、年六十。

る、誰に見せても死人ぢや。然るに中から物いへば、科人といふもこごわり、また「氣ちがひぢやさうな」といふのも、外からこじつけていふのではない。皆此の方に其の相、其の模様があるによつてぢや。これでよう御合點をなされませ。よいものをわるいとは人はいはぬ。何事も身を省るのが肝心ぢや。或人の道歌に、

世の中は何もいはずに伊豫簾  
其の善悪は人に見えすく。(續鳩翁道話)

二 一 わが家の富

徳富蘆花

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰か「いふ、狭くしてかつ陋なり」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狭しと雖も仰いで碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。神の月日は此處にも照れば、四季も來り、風雨雪霰かはる

季李 叟臾

がはる到りて、興淺からず蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩亦吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて、樹に滿つ。風ある日には、薄青く霞める空より、白き花ちらく、と舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。隣家に花樹おほし。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を着く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。庭隅に一株の山梔いしあり。五月い闇鬱陶しき頃、香しき白花

を開く。主も妻も無口なれば、此の花の我が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の梧あり。碧幹亭々として少しの歪なく、吾が如く直かれと教ふるに似たり。梧葉と手水鉢の側なる八手とは、葉闊うして、我が家の雨聲を多からしむ。

李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々ご地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくづく、ぼふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃えいで、唯一株、前の家主の植遺したる黄菊も咲出づ。名苑の花美しといふことも、秋のあはれ、閑寂の趣は却つて我が庭の一枝にあるべし。蛻巖の

熱熟

蛻巖 梁田蛻巖。明石藩の儒者。約一七〇年（約一七〇八年）歿。日影の九月九日の詩に、琪樹連雲秋色飛。獨憐細菊近荆扉。登ツ高能賦今誰是。海内文章落布衣。

翁ならば、獨憐細菊、近荆扉、こや吟ぜん。恥づらくは「海内文章落布衣」と唱すべき身にあらざることを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして満樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、其の葉翩々として飜り落つ。半夜夢さめて雨かご疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、處ごして落葉ならざるはなく、紅葉さへ落添ひて、寸金ご人はいふなる錦を我は庭に敷きつめぬ。

木の葉落盡してはさすがに寂しげなれども、日影月影いよいよ多くなりて、空を見、星を見るに、障少きは嬉し。

(自然と人生)

二二 蘆庵と君平

瀧澤馬琴

瀧澤馬琴 名は解、曲亭  
馬琴と號す。  
徳川末期の  
説家。約嘉永  
八年八月十  
二。前。約八  
年。約八  
年。約八  
年。約八



蒲生氏平

君平 蒲生氏。下野  
の人。名は秀  
實。高平は野  
郎。林平と稱  
共。奇。寛政の  
三。奇。寛政の  
年。約一。三。五  
年。約一。三。五  
四。年。約一。三。五

流れて、昇平の今の世まで、洗ひ清めんとする者の少きこそ  
安からね。いで、わが古學を興して、國體を張り天下の爲に  
死力を盡して國恩に報ずべし。乃ち、指を噬み、血を染め  
て、孝子之情有終身喪、忠臣之心無革命、時と大書し、愈、志願の

臍をぞ固めける。

その後君平、江戸に往來しける時、林家の門人となりて、帶  
刀して、儒學を唱へ、時に名高き儒者、國學者、文人、墨客と交り  
て、遊學すること久しかりき。されどその持論、時情に愜は  
ず、或はこれを迂闊とし、或はこれを狂妄として、嘲り、噓はぬ  
者は稀なり。君平これを物の數ともせず、愈、守りて自ら貶  
さず。嘗てその友に語りていはく、昔の儒官は明かに天朝  
の故實に通達し、六經を以てこれが資としたりければ、名正  
しく、事行はれざるここなかりき。然るに、今の俗儒は天朝  
の故實を知らず。なほ、夏夷順逆の理に暗くして、名を亂り  
言を紊るもの多し。その位にあるものは、その道を行ひ、そ

林家 徳川幕府に仕  
へて、代々大  
學頭たり。

六經 詩、書、易、禮  
記、春秋、樂。

迹跡

山陵志

二卷。歷代山陵のことを考證して記したるもの。

の位にあらざるものは、その言を行ふこと古今一致なり。わが憤を發し、志を立て、古學を興して、逸史を修め、力を經世に盡して、國恩に報じ奉らんと欲するは他なし、かの曲學阿世、名教の罪人たることを知らざる者ごごもに、鄰をなさじと思ふのみごぞ息まきける。

この頃よりして、君平、古昔の山陵多く荒廢して、その迹定かならざるものありと聞くこと久しかりしかば、まづ山陵志より創めんごて京に赴き、それより南海を越え、淡路に渡りき。素より路費の乏しきを憂ごせず、險を履み風雪を冒して、遂に六十六國、その半を經歷し、或時は里老に問ひ、或時は舊圖を考へて、諸陵存亡の趣を目撃したりけり。而して、

その著述の爲に、辛苦を辭せず、月日は旅寢に移れども、その志移らずして、愈、精力を盡しけり。

はじめ、君平、山陵探求の爲に京に赴きし時、かの地に絶えて知る人なかりければ、便らん方もなくて困じ果てぬ。時に小澤蘆庵は、古學を好み、て萬葉風の詠歌に名高く、世に拗ねたる隱逸なりと聞きたれば、その力を借らんとて、やがて蘆庵が宿所をおこなふに、それが僕出で迎へて、「いづこより」と問ふ。伴りて、「某は、下野なる宇都宮の蒲生伊三郎といふものなり。琴を好み候へども、田舎にはよき師なし。主人の翁は、琴の妙手にておはする由聞き傳へて、はるくご尋ね來つるにて候。」といふ。僕は奥に赴きてこれを告げたるに、

小澤蘆庵 歌人。名は玄中、蘆庵はその人の號。尾張の約一、二〇年、十九、致、年七

催遣

蘆庵は聲を高くして、あな無益にも訪はるゝものかな。汝出でて、しか答へよ。『主人は久しう客を辭し交を絶ちたれば、都のうちだにも親しうせるものは稀なり。琴は若かりし時、かき鳴らしたりけるを、遠近の人に知られて、『かれに聽かせよ、これに教へよ。』といはるゝがうるさければ、近頃うち摧きて薪に代へたり。かゝれば、所望に従ふべくもあらず。他に求め給へ。』といへといふ。君平は僕が報ずるをも待たず、翁の御答はこゝにも、つばらに洩れ聞えたり。某なほ一言あり。願はくは、枉げて聞きたまへ。われは實は儒者なり。しかぐゝの志願ありて都に上りつれども、相識れる者絶えて無し。翁の古學を好み給ふと、その氣質の俗ならぬ

虐虚

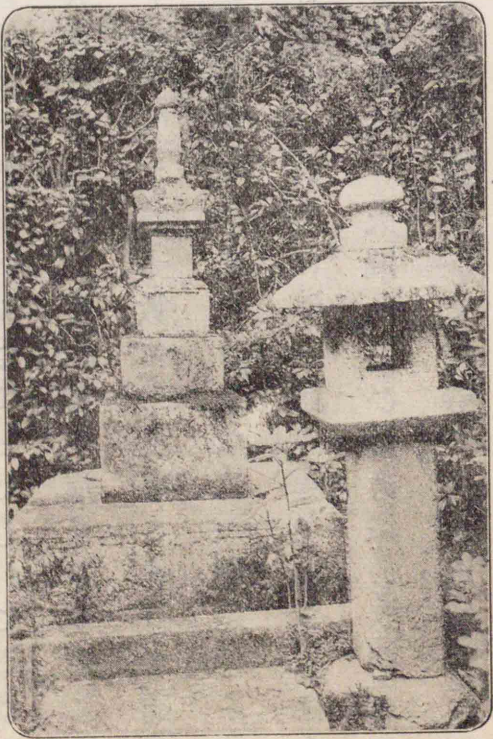
杖枝

こは、かねて傳へ聞きしものから、いひ寄る由のなきまゝに、『琴を學ばんとて來つ』こはいへるなり。こは、長者を欺くに似たれども、その虚言は、已むを得ざるより出でたるなり。今一度、吾殿を勞せん。この由取り次ぎ給へ。といふ。蘆庵もこれを洩れ聞きて、さりこは思ひかけざりき。そは、珍しき客人なり。對面せずば悔しきこともあらん。『こなたへ』こ申せ。こて、やがて面を會はせけり。君平深く歡びて、事の趣つばらに語り出づるに、蘆庵ひたすら感歎して、足下は得がたき學士なり。さる志ならんには、わが庵に杖を留めて、こころあたりの陵を靜かに探求し給へ。こて、また他事もなくもてなしけり。

これより君平は日毎に陵を尋ねめぐるに、ごもすれば日暮れて歸るを、主人はいつもみづから風呂を焚きて、入浴せさするを例ごせり。君平その心づかひを心苦しめて辭みたれど、これらの事は、ひたすらに客を愛するのみならず。足下の如き、國の爲に力を盡す人の疲勞を、聊かなりごもうち慰めん心ののみ。必ず辭み給ふな。とて聞き入れず。かかりし程に、君平は或夜、更闌けて、子二つの頃歸れるに、蘆庵は未だいねず。例の如く入浴せさせ、飯をすゝめ、さていふやう、われ足下を宿せる日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしをばせざれども、老僕を憇はせんごて、手づから風

織讖

呂をさへ焚くを思ひ斟み給はずや。陵を尋ねめぐればごて、今までは用なからんに、道草食うてか、老人に物を思はせ給ふごこ、心得がたし。と呟く。君平聞きて容を改め、翁のうらみ理なり。わが非を飾るにあらねども、こよひかく更闌けたるは、いさゝか故あり。懺悔のため、笑に供へん。今日は某の天皇の陵を尋ねけるに、日暮るゝまで尋ねもあは



墓の氏尊利足



等持院  
源宗山城國  
葛野郡衣笠山  
の麓にあり

磬磬

で、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて、年頃のうらみ心頭におこりて堪へられず。墓に向ひて罵ひけるは、「梟臣尊氏、靈あらば、今いふことを、たしかに聞け。汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して、逆に取り逆に守り、毒を後世に流してより二百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もために焼失せ、王室もこれによりて衰へ、歴代帝王の山陵すらも迹なくなりて、我等にさへ飽くまで物を思はずるは、みなこれ汝が罪なり。天罰おもひ知るべし」とて、思ふがまゝにのゝしり散らしぬ。かくて寺の門を出づるほどに、物ほしうなりければ、道の邊の酒屋に立寄り、怒に任せて飲むほどに、六七合を罄したり。さて酒屋をば出でたれど、

靈山  
京都の東山にあり  
長嘯子  
木下勝俊。秀吉の兄の北政所。の戦後、出家して東山に居す。慶安二年(約二七〇)歿。八十一歳。  
鳥居元忠  
徳川氏の忠臣。慶長五年(一六二〇)七月、伏見城を守つて死す。年六十二。

酔ひて足も定まらず。このまゝにて歸らば、必ず翁に叱られん、半ば醒して行かんご、株に尻を掛けたるが、うまいやしけん、驚き覺むれば、はや更闌けたり」と語るに、蘆庵は、呵々さうち笑ひ、さても世には似たる馬鹿者もあるものかな。われも去にし年、或日、靈山の邊に逍遙して、長嘯子の墓所を過ぎける時、行きもえやらずにらまへて、「長嘯子、不滅の罪あり。わぬし自らこれを知るか。わぬしは豊太閤の外族として、位高く采地も廣かるに、心さま武士に似ず、伏見の籠城に敵の旗色に鬼胎を懷きて、鳥居元忠等を棄殺にし、かつ事平ぎて後、罪を蒙り纔に命を助けられたるを幸にして、恥を知らず。心にもあらぬ世捨人顔して、えせ歌多く詠じたる、一盲

歌殿

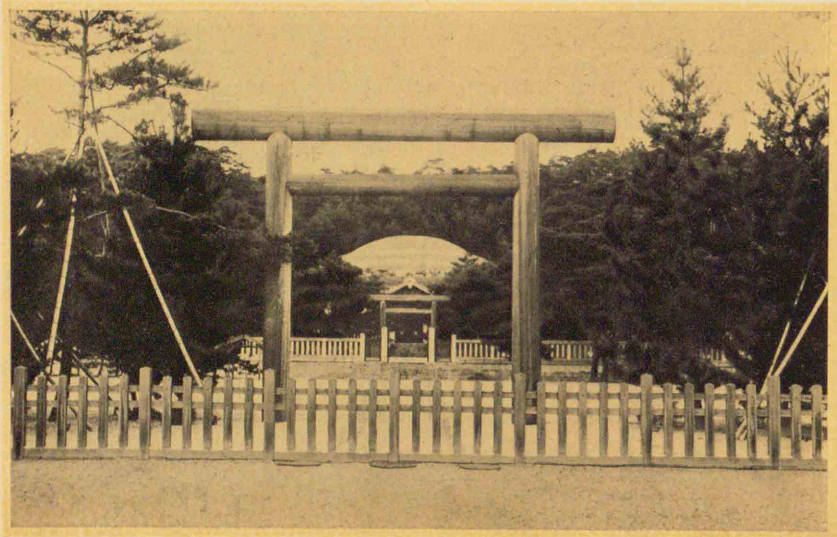
衆盲を引きしより、歌の調のわるくなりて、今に至るまで直らぬは、これ不滅の罪にあらずや。冥罰<sup>ミヤバツ</sup>かくの如くならん』ご罵り散らしたるここありけり。こはよく似たるにあらずや』ご語りもあへず、聞きも終へず、ひごしく腹をかへけりごぞ。(兎園小説)

兎園小説  
二十卷、文政  
八年設立の兎  
園會社の著作  
を編輯せしもの

○  
下野國の蒲生君平は、古陵の分き難くなりゆくを歎き、山陵志つくらんとて都へ上り、こゝかしこ行きめぐりたるがわが家にもしばしありて、また國にかへりなんとする別れに、  
小澤 蘆庵

君がため木曾の山みち雲わけて

また往ぬらんか木曾の山みち



— 伏見桃山御陵 —

田山花袋

名は録彌、群馬縣の人、小説家。

二つの御陵  
明治天皇と昭憲皇太后との御陵。

天武天皇の御陵  
大和高市郡檜隈の大内陵。

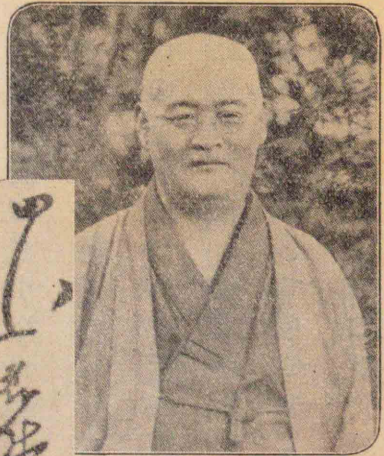
柏原陵  
山城伏見の柏原にある桓武天皇の御陵。

### 二二三 桃山御陵

田山花袋

桃山の二つの御陵では、いろ／＼なことが考へられる。今を以て古を考へるといふことがあるが、實際私はその前に額づくこと、私たちの見て来た事ばかりではなしに、遠い昔のことまでも、取りあつめて考へられずには居られないのであつた。

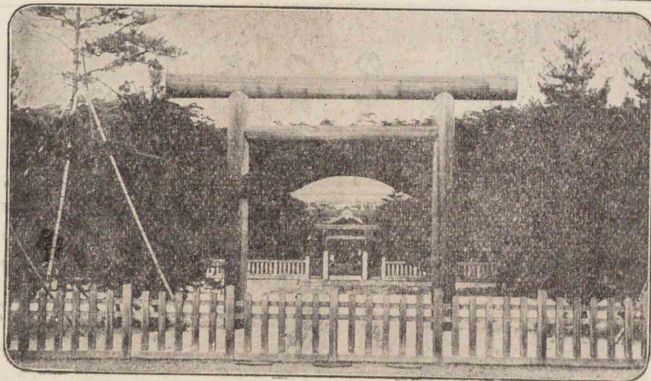
私はそこで天武天皇の御陵へ、あそこから持統天皇の御陵を合せられたことなどを想ひ起した。また柏原の御陵に、御子の嵯峨天皇が涙を流して祈念せられた事を想ひ起した。それはその大小はあつたにしても、昔はどの天皇でも皆私たちが見て来たと同じやうに、一



田山花袋

理埋

泉涌寺  
京都市下京區  
今熊野町

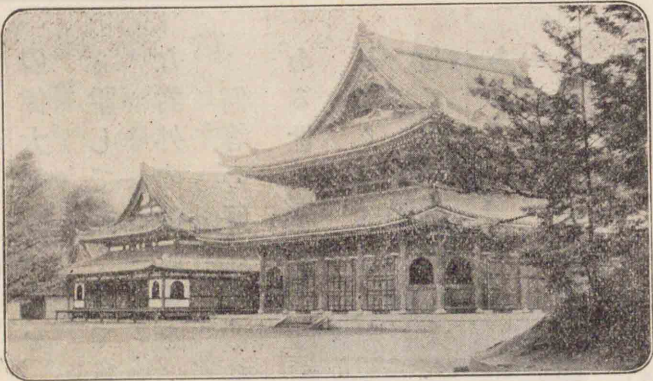


桃山御陵

つゞその陵を築かれたばかりではなく、その當時の國民の悲嘆をも、俱にその中にまぜて埋葬せられたのであつた。

であるのに、中世以後はごうなつたであらうか。さうしたことは絶えてしまつて、あの京都の東山の南のはづれに近い泉涌寺の中に、微かにその存在を示されるだけになつたではないか。そして、そこからあつた一つづの御陵などでも、亡びた國の帝王の陵でもあるかのやうに、全く顧みられずに何世紀かを過ぎしたではないか。中には、これがこれだか分らなくなつたやうなものもあつたではないか。

つまりそれだけ國が衰へ世が沈んでゐたので、さういふことを



京都泉涌寺

して置いてはいけないといふことは、足利時代の將軍も、信長も、秀吉も、家康も、またそれにつゞいた後繼者も、皆知らない事はなかつたであらうけれども、或は經營に忙しく、或は戰亂に逐はれ、或は自己の驕奢に心も盲ひて、そこまで手を出さず餘裕はなかつたのであつた。  
しかし長い間の歴史の波は、漸く大きなものを打出して來た。私たちは次第に暗い暗い歴史から、眼もきらめくやうな明るい方へ出て行つた。それを思ふに、維新の時に山陵の荒廢に目をつけて、それによつて勤王の志を起させようとした者のあつた事なども、徒爾には見逃してしまふことの出来ない事實であつた。

矮倭

桃山の御陵に参拜する者は、誰かわが大倭の昔を思ひ出さぬものがあらう。千年にして初めてその昔に還された、その明治天皇の偉大な御功業を。自ら戸を閉ぢるやうな卑屈な政治の状態から脱して、飽くまで外へくく伸びて行かうとせられた、その立派な對外の硬政策を。

何等の好運ぞ。私たちは大倭時代よりも、更に一層光輝あり、力ある世を、歴々と眼前に見ることが出来たのである。佛教などにわるく捉はれて、夥しく感傷的になつた社會の空氣から全く脱却して、更に自由に大きく呼吸きそくつくことが出来る世に遭逢したのである。

私は桃山御陵の前に立つ度ごとに、いつも雄大な時の羽風が、耳邊を掠めて通つて行くのを聞き得るやうな心持がする。

(花袋行脚)

南洲  
西郷隆盛。

二四 南洲遺訓



西郷隆盛

事大小ことなく、正道を履み至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支さしつかふる時に臨み、策略を用ひて一旦その差支を通せば、後は事宜次第工夫の出来るやうに思へども、策略の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる様なれども、先に行けば成功は早き者なり。身を修むるに克己を以て終始せよ。總じて人は己に克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝものぞ。よく古今の人物を見よ。

破敗

賭賭

事業を創起する人、大抵十に七八までは能く成し得れども、残り二つの終まで成し得る人は稀なり。始はよく己を慎み事をも敬する故、功も立ち名も顯るゝなり。功立ち名顯るゝに隨ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼・戒慎の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、その成し得たる事業を負み、終に敗るゝものにて皆自ら招くなり。故に己に克ちて睹ず聞かざる所に戒慎すべきものなり。人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。過を改むるに、自ら過てりごだに思ひつかば、それにて善し。その事をば棄て、顧みず、直ちに一步踏出すべし。過を悔しく思ひ取繕はんごて心配するは、譬へば

茶碗をわり、その缺を集めて合せ見るが如く、詮もなきことなり。

命もいらす名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大事は成し得られぬなり。

道を行ふ者は天下舉つて毀るも足らずごせず、天下舉つて譽むるも足れりごせず、自ら信ずること厚きが故なり。

天下後世までも、信仰悦服せらるゝものは唯これ一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人、その數擧げて數へ難きが中に、獨り曾我兄弟のみ今に至りて兒童婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤きが故なり。誠な

曾我兄弟  
兄は十郎時成  
弟は五郎時致  
後鳥羽天皇の  
御代の人(約  
七四〇年前)

らずして譽めらるゝは僥倖の譽なり。誠篤ければ、たこひ

當時知る人な

くとも、後世必

ず知己あるも

のなり。

今の人才識

筆蹟  
幾歴辛酸志  
始堅丈夫玉  
碎愧觀余一  
不遺事人知否  
買下爲二兒孫一  
武美田上  
村吉

南洲筆蹟

あれば事業は心次第に成さるゝものと思へども、才に任せ  
て爲す事は、危くして見て居られぬものぞ。體ありてこそ  
用は行はるるなれ。

後篇

藩翰譜抄

藩翰譜について

新井白石

江戸の人、名  
は君美、白石  
順庵の門に學  
ぶ。甲府侯徳  
川綱豊に仕  
へ、綱豊に仕  
將軍と成りて  
や、その侍講  
となりて政講  
翼の功著し、  
後致仕して著  
述に勉む。著  
究に卓等の研  
究に卓等の研  
約二〇十年  
前十九年六

甲府宰相徳川綱豊後に六代將軍家宣が、新井白石の名聲を聞いて、慕は  
しく思ひ、儒臣として之を聘したのは、元祿六年の冬、白石三十七歳の時で  
あつた。白石は日々櫻田門外の藩邸に出仕して、講を綱豊に進めたが、そ  
の最も赤誠を込めたのは、通鑑綱目の講義であつて、常に侃々諤々の説を  
呈した。さうして講筵の後には、必ず我が國史について、明主賢君の事蹟  
を説き、以て相發明する所あらしむるに努めた。就中、徳川家の歴史は最  
も精密に語り、綱豊も亦心を潜めて聞いたのである。

そこで綱豊は白石に囑して、幕府創業以來の萬石以上の諸侯の事蹟を  
録して上ることを命じた。時に元祿十四年春正月、命を受けた白石は、  
その年七月筆を執り始めて、十月に至つて稿を脱した。愈、綱豊に進むる

藩翰譜について



白石保長

に至つたのは、翌十五年二月、白石四十六歳の時であつた。

この書筆を慶長五年關ヶ原の亂をさまつて、徳川家の基礎の定まつた時に起し、四代將軍家綱に至るまで八十年間、萬石以上の諸侯三百三十七家の歴史である。正編十卷、附録二卷、凡例目録一卷、すべて十三卷、分ちて二十冊が出来た。綱豊はこれを「藩翰譜」と名づけた。しかしながら、此の書は、此の時直ちに世間に發表されずして、綱豊は再び白石に命じて校考せしむる所あり、その完成には、殆ど十年の日子を費して居る。

この書は、必ずしも白石の本領とは言へぬかも知れぬが、併し如何なる方面に於ても天分の豊かな白石は、この書によつて、又十分に史家の面目を發揮してゐる。殊にその文體の圓熟、行文の妙趣に至つては、その自叙傳「折たく柴の記」と相並んで、和漢混淆文の上乗なるものとして、國文學史上に重要な地位を占むるものである。

一 紀伊大納言頼宣

大御所

徳川家康

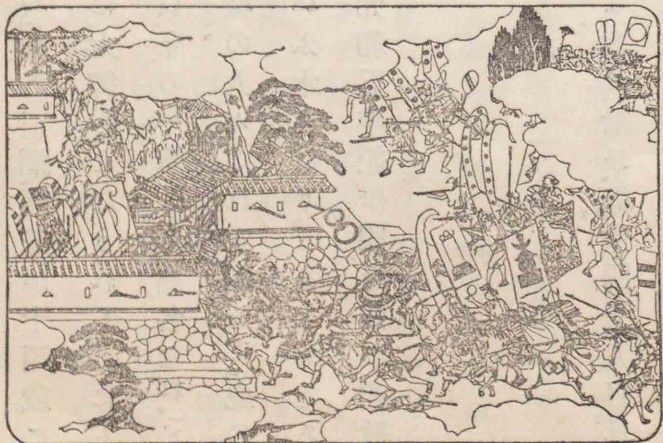
夏の陣

元和元年四月、五月

松平正綱  
松平信綱の養父、日光街道の杉並木を植ゑし人

紀伊大納言頼宣初は頼將は大御所第十の御子なり。大阪夏の陣に先陣既に軍始ると聞き給ひ、揉みに揉んで馳せ來らせ給ひしかども、軍事終りしかば、大御所の御陣に參り給ひ、頼將先陣を賜はらざりし故に今日の戦に合はず、返すくも口惜しく候。さて、御泪を流し給ひしかば、松平右衛門大夫正綱殿は、いまだ御年も若くわたらせ給へば、かゝる事には、幾度も遇はせ給ひなはず。さのみな御恨み申させ給ひそ。

大阪夏の陣





虎の子は

虎豹之子雖モ  
未レ成、文已  
有ニ食牛之氣  
（戸子）

申ししに、この殿以ての外に御氣色損じ、やあ正綱、頼將が十四歳に  
遇ふこと、復びやあるべき。と仰せけるに、大御所、よにうれしげにて、  
「今日、頼將がいかなる軍したらんより、只今の一言こそ高名なれ。」と  
仰あれば、御前伺候の大名小名、御内外様の人々、これを聞いて、虎の  
子は、地に落つれば牛を食ふ氣ありといふ本文あり。あなおそろ  
しの御心や。と、皆舌をぞふるひける。元和五年、紀伊國を賜ひ、和歌  
山の城に移り給ふ。

二 鷹狩のえもの

將軍家、御鷹狩のために目黒の邊にならせ給ひ、御供四五人召具  
せられ、成就院と聞えし寺に入らせ給ひしに、住持の僧、頭巾引きか  
づきて、垣結ひて居たりけり。將軍家、「こゝ借りて休み候はん。」と仰  
せられしに、住持の僧、人々は何處より參らせ給ふ。といへば、將軍家

將軍家

三代家光。

目黒

東京府荏原  
郡。江戸の西  
南郊。

の御供の者なり。と仰せらる。「勞れ給ふらん。心靜かに御休あれ。」  
とて請じ入れ奉る。僧は内に入らんこせしを、御僧、此處にましま



して御物語あれ。と仰せければ、打向ひ  
蹲り居る。客殿の壁に、盡く菊を彩り  
描けること、拙き工の筆とも見えず。

鷹將軍家「かゝる片田舎の御寺には珍し  
き結構に候。いかなる檀那のわたり  
狩候。」と尋ねさせ給へば、「のたまふ如く、こ

ゝは江戸遠き境なれば、然るべき檀那  
ごてもなし。保科肥後守と申す殿の  
御母上が、常には祈禱の事など御頼あ  
れども、それも家貧しければ布施のもの豊かならず。といへば、それ  
はまづよき事に候。その外にも有るやらん。」と仰せらる。「いや、其

保科肥後守  
保科正之、秀  
忠の第三子。  
母は神尾氏お  
靜の方。

僅かの地  
信濃國高遠三  
萬石

の外にあるは、皆數にもあらぬ人々なり。これにわたり給ふ人々も將軍の御家人と承れば、申すも恐なれど、あの肥後守殿と申すは、今の將軍家の正しき御弟と承るに、僅かの地領し貧しくわたらせ給ふこそいたはしけれ。さらぬ賤しき者も、兄弟の親み深きは、人の習なるに、いかなれば、よき人は情なきものに候らん。といひしに、御顔の色少し損ぜさせ給ひて、御供の人人をきと御覽じて、いざ参らん。上様も、はや御歸あらせ給ふべき程なり。とて、つと御出あれば、人々は、御僧の情ゆるゑ、足休みて候。又こそ参らめ。とて打出でぬ。暫しが程過ぎて、御供の人々群り來り、上様は何處へならせられしぞ。と問ふに、住持の僧は、われく、上様の御事は知らず、御供の人とて、今までこれに御休ありき。といふ。それこそ上様にてあれ。といはれて驚き、あな悲しや、いかなる罪にか遭はん。と、一月ばかりが程は門の外に足音高く人の過ぐるにも魂を消す。程なく正之朝

山形  
二十萬石。ほ  
どなく奥州會  
津に移り二十  
三萬石。

臣へ多くの地つけて山形の城まゐらせられ、また目黒の寺にも、その事もなく地寄附せさせ給ひしなり。  
この御世には、御鷹狩に事よせられて、賤しき者の憂ひ歎きの事ども知し召し、恵み施させ給ふと、いくらもありけり。

三 本多重次

徳川殿  
徳川家康。

本多重次  
通稱作左衛  
門。鬼作左と  
稱せらる。

天正三年三月、徳川殿、御背中に疔といふもの出來て、既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡しけれども、その驗なく、たゞ弱りに弱らせ給ひ、自らも、これまでと思し召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御跡の事ども仰せおかる。人々の周章いふに及ばず、土民百姓等に至るまで、その程々に従ひて、祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。本多重次、御枕に取付きて、泣くく、申しけるは、「殿も定めて覺えさせ給ひなん。重次が昔この病をうけしに、たち

ごころに驗得し良藥の候。彼を召して見せ試み給ふべし。ご申す。諸醫既に手を束ね、家康また死を決す。この上醫療その詮なし。且は命を惜しむに似たり。ごて用ひ給はず。

重次大いに怒つて、かほどの大事の腫物、輕々しく思し召し侮つて、事急なるに及べばこそ、諸醫も術盡きぬれ。それにまた、良醫して治し參らせんごするをも用ひ給はず、失せ給はんご、御心からごはいひながら、あつたらしき命かな。諸醫、術盡きぬご申す上は、彼等いかでか治し參らすべき。年老いたる重次が、御跡にさがつての御供かなふべからず。さらば御先へ參らん。ごて、御前をまかり立つ。徳川殿大いに驚かせ給ひて、あれごめよ。ご仰せければ、近く侍ふ人々、走り出で引きごめ、仰せらるべき旨あらせられ候。ごいふ。重次大いに聲を怒らして、最後の暇乞うて罷り申す者を見苦しき殿原の止めやうや。ご罵つて出でんとす。されば候。その

人を止めよごの御使が、えこそ止めねご申してんや。おごなしくも候はず、本多殿。ごいはれて、げにはさも候。ごて、御前にまゐる。

徳川殿、汝は物に狂ひてかくはいふか。家康いまだ死し果てぬに、たごひ家康が命終るごも、汝が世にあらんを頼みにこそ死すべけれ。又、汝等もいかにもして、一日も世に残りて、若き者ごも掟して、我が家の絶えざらん様を計らんごは思はずして、詮なき死の供せんごごやある。ご仰せければ、いや、それは人に依つての事に候。重次も、今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、その詮なし。重次若年の昔より、此處彼處の軍に従つて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。かたはごいふほどのかたは、重次が身一つに餘つて、世に交はらん事叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に恐れも敬はれも仕れ、殿のなくならせ給ひなば、他人までも候まじ、まづ、御躰の北

北條殿  
家康の女婿  
北條氏直

條殿、我が國々を取らんごし給はんに、若き人々が、行末久しう仕へんご頼み切つたる主に、忽ち別れて、氣おくれし、はかしく、しき矢の一すぢをも射出す事叶ふべからず。當家滅ぼされんこと、踵を廻すべからず。重次それまで永らへて、あの年寄りたるかたは者は、徳川殿の譜代にて、何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世には恥をさらすらんご後指さされんこと、老の恥、何事かこれに過ぎ候べき。この比までも、武功の家の人々、御當家に召されて、さらぬ人にも、手を束ね膝を屈めしを、世にもあはれと思ひしが、今はこの老人めが身の上に成つて候ご存ずれば、殿に後れまゐらせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果もあさましきに因つて、御先に死することにて候ご申す。「汝がいふ所ごごわり至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて、家康空しくならんごも、汝もまた家康が心に任せ、いかなる恥を

見つべしごも、一日も生き残つて、後の事よきに計らふべしご存ずるや否や。」と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次、いかでまた仰をや背くべき。」と申す。「さらば醫師召させよ。」とて召さる。醫師やがて参つて、御灸治宜しかるべし。」と申せば、重次、艾取つてすう。御灸の痛み、覚えさせ給はねば、艾を増し加ふる事多くして後、聊か痛ませ給ふよし仰せければ、御薬をつけて参らせ、御薬湯をもすゝめ奉りしに、その夜の半ばに、御腫物潰れて、膿水血夥しう流れ出でて、御惱たちごころに、輕ませ給へば、重次は嬉し泣に、聲を限に泣く。御前伺候の人々も感涙を共に流しけり。(第四)

四 板倉重宗

周防守重宗は勝重が嫡男なり。元和六年、三十五歳にて、父が薦に依つて京職に補せられ、職に在りしこと凡そ三十餘年、人の敬ふ

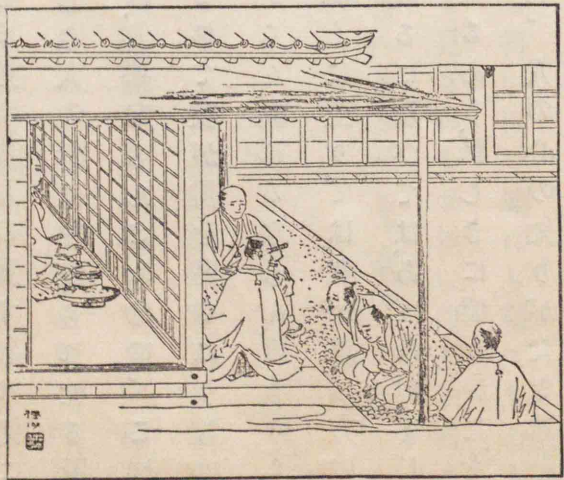
京職  
京都所司代。  
父勝重、老年  
の故に所司代  
を辭せし時、  
我が子重宗を  
めし、任に薦  
めしなり。

こと神明の如く、愛することまた父母に似たり。父も子も、同じ名臣にて、君の寵恩最も厚かりき。

この人の、職に在りし時の名譽、天下の稱する所擧げて數ふべからず。職に任じて後、日毎に決斷所に出づるに、西面の廊下にして、遙に拜することありて決斷所に至る。此處には茶磨一つを据置き、明障子を引立てて、その内に坐し、手づから茶磨きながら訴を聞分つ。人皆この事どもを不審しあへり。されども問ふことも得ならず。遙か年經て後、問ふ人ありしに、答へて曰く、まづ決斷所に出づる時に、西面の廊下にて拜することは、愛宕の神を拜するなり。多くの神の中に、殊に愛宕は靈驗あらたなりと聞きし程に、所願ありてかくは拜しぬ。その所願といふは、今日重宗が訴を斷らん、心に及ばんほどは、私の事あらじ。若し過ちて、私の事あらんには、たちごころに命を召され候へ。年頃深く頼み參らする上は、少し

愛宕の神  
京都の西北愛  
宕山にある愛  
宕神社。

も私心あらんには、世に永らへさせ給ふなど、日毎に祈誓するにて候。また訴を判つことの明かならぬは、我が心の事に觸れて動くが故なりと思ひ爲しぬ。よき人は自ら動かさざらんやうこそあらめ、重宗それまでのことは叶ひ難く、たゞ我が心の動くに靜かなることを試みるには、茶をひきて知る。心定まりて靜かなる時は、手もそれに應じて、磨の環ること平かにして、きしられて落つる所の茶、いかにも細かなり。茶の細かに落つる時に至りて、我が心も動かさずと知り、その後漸くに訴を判つ。また明障子を隔てて訴を聞くことは、凡そ人の面貌をうち見



重宗茶を碾く圖

るに、憎さげなるご、憐がましきごあり、また、かたましきあり。その品多くして、いくらごいふ數を知らず。見る所の誠しきご思ふ人のいふごは、誠ご聞かれ、かたましご見ゆる人の爲す事は、何にても皆いつはりご見ゆ。又、憐がましき人の訴は、曲げられたる所あるよご思はれ、憎さげなる人の争は、僻事ならんごおぼゆ。これ等の類は、我が目に見る所に心の移されて、彼が言を出さぬうちには、や我が心のうちに、邪ならん、正しからん、曲れるならん、直きならんご思ひ定むるほどに、訴の言葉を聽くに至りては、我が思ふ方に、その事を聽きなすご多し。訴の成るに及びては、あはれがましきに、憎むべきあり、憎さげなるに、憐なるあり、誠しきに、偽りかたましきが多きご、このたぐひ殊に多し。人の心の知りがたき、容を以て定めんご叶ふべからず。古の訴を聽くには、色を以て聽くごあり。それは、覆はるゝ所なき人の事なるべし。重宗が如きは、

見る所について、心覆はるゝご多し。又、さなきだに訴の庭に臨んでは、恐しかるべきに、まして生殺を掌る人を見ては、まばゆくいぶせて、おのづからいふべき事も得いはで、罪にも科にもあふ人あらんご思へば、所詮、互に面を見も見られもせぬには、若かじご思ひて、かくは座を隔つるにて候ご答へきごなり。(第五)

五 浅野長政

文祿の初め朝鮮の事起る。同じき二年六月浅野彈正少弼長政かの國に渡る。石田増田等ご相議し、諸軍勢を率して晋州城を攻め落す。今年の冬、太閤朝鮮の軍はかくしからぬを怒つて、徳川殿を始め宗徒の大名を名護屋の陣に集あ、朝鮮の軍、今のやうならんには、いつ事定るべしごも覺えず。今は秀吉自ら向はんご思ふ。三十萬の勢を三手に押分け、利家氏郷に大將せさせ、三道より向ひ、

浅野長政

豊臣秀吉の相  
婿(秀吉の室  
北政所は長政  
の妻の姉)

晋州

今慶尚南道の  
道廳所在地、  
釜山の西三十  
里

名護屋

肥前松浦郡。

利家  
前用利家。  
氏郷  
蒲生氏郷。

朝鮮を打破り、まつすぐに大明に攻入らん。本朝の事、家康さてま  
しませば、心に懸るところなし。方々如何にか思ふ。と仰あり。徳  
川殿御氣色損じて利家氏郷等に向ひ、日本の大名多き中に、方々二  
人選り出されて、一方の大將を賜はらんこと、弓矢取つての面目、何  
事かこれに過ぎん。抑、家康苟も弓馬の家に生れ、戦の中に年老い  
ぬ。今この大事に及びて、いかで人々の跡に留つて、徒らに本朝を  
守り候はん。少勢には侍れども、家康も軍勢を率ゐて、必ず一方の  
先陣を承るべし。方々の御推舉を仰ぐ所に候。と宣ひしに、彈正少  
弼長政進み出で、暫く候、徳川殿。殿下この年月の御振舞、昔の御心  
ごや思し召す。年経る狐の入り替つて候を、何事か宣ふべき。と、申  
しも、果てぬに、太閤御佩刀に手を掛けられ、やあ、秀吉が心に狐の入  
り替つたるいはれ、きつと申せ。申し損じなば、しや首打落してく  
れんず。と、責めかけ、仰せけるに、彈正ちつとも騒がず、長政等が

殿下  
關白の敬稱。

如きは、何百人が首刎ねられんにも、なんでふ程の事か候べき。抑、  
此の年頃、由なき軍起して、異國のみにあらず、本朝にも父を討たせ、  
子を打たせ、兄弟を失ひ、夫に別れ、妻に離れ、歎き苦しむもの、天下に  
満つ。又それより兵糧の轉漕、軍勢の賦役、六十餘州が内悉く荒野  
となる。今日御參向あらんには、五畿七道の間、竊盜強盜等、蜂の如  
くに起りて、安き心も候まじ。徳川殿いかに思ひ給ふごも、いかで  
これを防ぎて、動きなく御跡を守り給ふ事かなふべき。此等の事  
を思ひてこそ先陣ごは宣ふらめ。されば昔の御心ならんには、か  
ほごの事、なご御心附なかるべき。かゝる御心の附かせ給ふ事、こ  
れ只事にあらず、一定古狐の入り替つたるには候はずや。賤しき  
者の諺に、人取らんとする鼈は必ず人にと取らるごは、此の事にて候  
ぞ。と、憚る所なく申しければ、太閤、鼈にもせよ、狐にもせよ、おのが主  
と頼みたらん者に、雑言をはく條、奇怪なり。と、飛びかゝらんごし給

逆徒  
薩摩の人梅北宮内、肥後を侵して熊本城を襲ふ。

本多  
中務少輔忠勝。  
國人  
加藤氏の士、界善左衛門之を佐敷城に誘ひて誅す。

安土  
滋賀縣蒲生郡、天正四年信長、安土城を築く。

仕の初  
一豊の始めて信長に仕へしは天正六年なり。  
屋形  
主家、織田氏を指す。

ふを、利家、氏郷押隔て、人々御前に伺候せり。長政が首を刎ねられんに、御手を下さるゝまでも候はず。そこ罷り申せ、彈正と云はれて長政は、さらぬ體にもてなし、人々に色代して、己が陣に歸り、御使を待つて腹切らんとす。重ねて仰出さるゝ旨もなし。かゝる所に肥後の國に逆徒起りぬと、早馬を參らす。太閤大いに驚き給ひ、徳川殿に御使あつて、長政具して御參りあれと仰せらる。やがて長政召具せらる。太閤、肥後の國に逆徒起りぬ、汝が嫡子左京大夫幸長、追討の使たるべしと仰せ下さる。長政大いに悦びぬ。又徳川殿に向ひ給ひ、幸長いまだ年若し、本多を副へて給ふべしと仰せらる。やがて彼の逆徒、國人等討つて參らす。軍をば出さず。長政仰を承つて肥後國に向ひ國政を沙汰す。(第七)

六 山内一豊

一豊、織田家に出で仕へし初、東國第一の名馬なりとて安土に引來て商ふ者あり。織田殿の家人等これを見るに、誠に無雙の名馬なり。されども價あまりに貴くして、買ふべき人一人もなく、空しく引きて歸らんとす。

その頃、一豊は猪右衛門尉と申し、が、この馬欲しと思へども、求むることいかに叶ふべからず。家に歸りて、世の中に、身貧しきほご口をしきことばなし。一豊仕の初なり。かゝる馬に乗りて、見參に入りたらんには、屋形の御感にも預るべきものをと獨言いひしに、妻はつくづくと聞いて、その馬の價いかばかりにやと問ふ。「黄金十兩とこそいひつれ」と答ふ。妻、さほごに思ひ給はんには、その馬求め給へ。價をば、みづから參らすべしとて鏡の筥の底より黄金十兩取出しまゐらす。一豊大きに驚き、この年頃、身貧しく、苦しきことのみ多き中には、この黄金ありとも知らせ給はず。いか



馬揃  
信長公記に、  
天正九年二月  
二十八日の事  
なりとあり。

に心強くは包み給ひけん。されども、今この馬得べしとは思ひも  
よらざりき。且は喜び、且は恨む。妻は、宣ふ所こゝわりにこそ侍  
れ。さりながら、これは妾が父の、この家に参りし時に、この鏡の下  
に入れ給ひて、あなかしこ、これよの常の事に用ふべからず。汝が  
夫の一大事あらん時に参らせよ。とて賜ひき。されば、家貧しく苦  
しむなごいふことは、よの常の習なり、これは、いかに堪忍びても過  
ぎなまし。誠か、この度、都にて御馬揃あるべしなど聞ゆ。若しさ  
もあらんには、天下の見物なり。君また仕の初なり。かゝる時な  
らでは、屋形にも、朋輩にも、見知られ給ふべきよしもなし。良き馬  
召して、見参に入れ給へご思へばこそ参らすれ。ごいふ。一豊やが  
てその馬求む。

程なく、都にて馬揃のありし時、織田殿この馬御覽あつて、大いに  
驚き給ひ、あつばれ名馬や。何者の馬ぞ。ご仰せありしに、これは、東  
國第一の馬なりとて、商人が引いて参りしが、餘りに價貴くして、誰  
も買ふこと叶はず、空しく引いて歸るべかりしを、山内が買ひ得て  
候ひき。ご申す。信長聞し召し、價貴き馬なり。當時天下に、信長が  
家ならで買ふべき人なしとて、奥より遙々來りしを、空しく還した  
らんには無念の至なるべし。その山内は、年頃久しき浪人と聞く、  
家もさぞ貧しからんに、買ひ得たる事の神妙さよ。且は信長の家  
の恥をも雪ぎ、且は武士のたしなみいと深し。ご感じ給ふこと大方  
ならず。これより次第に身を起せりごいふ。(第七)

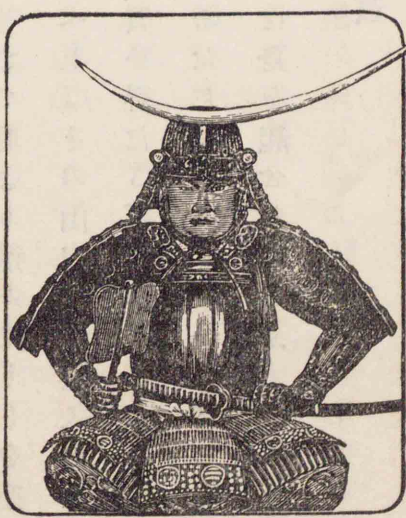
七 武士氣質

上杉景勝が兵起りし時、伊達左京大夫政宗は急ぎ本國に歸りて、  
搦手より攻入るべきよしの仰承つて、大阪を打立ち、夜を日に繼ぎ  
て馳せ下る。

上杉景勝  
上杉謙信の養  
子。慶長五年  
石田三成と計  
つて家康を、除  
かんとする。當  
時會津に在り。  
伊達政宗  
伊達城主。

白河 福島縣西白河郡陸羽街道にあたる。  
白石 宮城縣刈田郡陸羽街道にあたる。  
相馬 福島縣中村相馬氏の所領。

白河より白石しほにいたる間は、皆敵の中なれば道ふさがりぬ。常陸國を廻りて、磐城相馬にさしか、つて國に歸らんとするに、相馬また累代の敵國なり。政宗は僅かに五十騎ばかり引具して、常陸國を経て相馬の境に至り、まづ相馬が許に使者を立て、このたび徳川殿上杉を征伐し給ふによつて、政宗搦手より向ふべき由を承りぬ。路次既に塞がりて候ひしほどに、東路に隨ひて漸くこの境に到り侍りぬ。あまりに道を早めて打ちしほどに、士卒悉く勞れぬ。願はくは、城下に旅館點じて給は



白河より白石にいたる間は、皆敵の中なれば道ふさがりぬ。常陸國を廻りて、磐城相馬にさしか、つて國に歸らんとするに、相馬また累代の敵國なり。政宗は僅かに五十騎ばかり引具して、常陸國を経て相馬の境に至り、まづ相馬が許に使者を立て、このたび徳川殿上杉を征伐し給ふによつて、政宗搦手より向ふべき由を承りぬ。路次既に塞がりて候ひしほどに、東路に隨ひて漸くこの境に到り侍りぬ。あまりに道を早めて打ちしほどに、士卒悉く勞れぬ。願はくは、城下に旅館點じて給は

長門守義胤 相馬氏。上杉景勝に黨す。

駒が峰 磐城國中村の北方にあり。

らん。馬の足を休めて、明日は國に入らんぞ存ず。こいはせたり。長門守義胤これを聞いて、あつぱれ、運の盡きぬる奴ばらかな。たゞにても伊達は相馬が年來の敵なり、ましてや身方討たれん一方の大將承るこいふものを。いで、今宵一夜討して、案内知らぬものごもを、こゝかしこに追詰めて、一人も残さず討取つて、年來の仇に報い、この度の賞に預らばや。さて頓とがて民家をしつらひて迎へ入れ、家子郎從等召集めて、夜討の様をぞ議したりける。爰に水谷三郎兵衛尉某、遙かの末座より進み出で、末座の意見恐れ入つて候へど、既に僉議の座に列つて候上は、心に存ずる所を申さざらんはその詮なし。抑、窮鳥懷に入る時は、獵者もこれを殺さず。こころ承れ。政宗ほどの大名が既に年來の怨を棄て、君を頼みて來りしを、たばかつて聞々討たんは、勇者の本意とする所にあらず、長き弓矢の瑕瑾なり。また我が城を去つて、かの國の境駒が

峰に到らんこと、行程僅かに三里。今日の日未だ未の時に下らず。政宗おのが境に到らんごだに思はば、日ゆふべならざる間に到りぬべし。それに僅かの勢を以てこゝに止ること、豈に深き謀計あらざらんや。たゞ同じくは我が備を全うして、彼に代つて夜を守り、まづこの度は本國に返し給ひ、重ねて戦に臨まん時、尋常に軍して、勝負を兩家の天運に任せらるべうもや候はん。と申しければ、満座の輩皆この議に同じて、彼が旅館の邊に、糧料魚鹽秣糠藁に至るまで積み置きて、夜に入りては四面に篝火焚かせ、夜を巡らせ、警衛心を盡してけり。

義胤が侍ども、政宗があまりに取鎮めたる體を見て、にくしいが彼が振舞を試みん。とて、夜更けて馬一二匹切つて放つ。雜人ばら走り散つて、以ての外に騒ぎ罵る。政宗は小童一人に燭持たせ、白き小袖上に打掛けて、左の手に刀提げて立出で、相馬殿の御人や候、

御人や候。といひし時、さむらふ。とて参りければ、物音高う候、何事にや。政宗が雜人ばら狼藉候はんには、よく鎮めてたべ。とて、また内にぞ入りにける。かくて夜明けけれども立ちもやらず。巳の刻ばかりになつて、義胤が許に使用して一禮し、靜かに馬を打つて行く。窃かに人を付けて見せたるに、かの國境の駒が峰のあなたに、伊達が軍勢雲霞の如く充ち満ちて出迎へぬ。

かくて關ヶ原の合戦終り、天下悉く平ぎて、相馬既に所帶を沒收せられ、家亡ぶべきにきまる。政宗徳川殿にたび々、歎き奉りしかば、その事もなく、年月を経て後、本領をぞ賜うたりける。この時より、かの家年毎の評定始には、満座の輩一々に水谷が子孫の座の前に進み寄り、水谷殿の御意見違ふことあるべからず。と色代して罷出づること、長き佳例となりにけり。(第八)

關ヶ原  
岐阜縣不破郡關ヶ原役は慶長五年九月。

八 人の諫

本多正信 三河の人、幼にして家康に仕ふ。人となく、その帷帳に侍す。

上野介 正純。正信の子なり。父と共に家康の寵遇を受く。元和八年、事により配流せられ、寛永十四年、所に死す。

大殿 徳川家康。

本多正信、或る時、嫡男上野介に語りしは、昔大殿濱松の城にましましし時、ある夜、外様の侍三人、御前に召されて仰を蒙る。ことありて罷り出づ。その中に一人止りて、懐より一封の書を取り出し、自ら封を切りて奉る。「それは何ぞ。」と仰せられしに、「是は、某年ごろ諫め奉らん」と存ずる所を書きつらねたるものにて候。よき序なれば奉る所なり。」と申す。殊に御心地よげにて、「それにて讀み候へ。」と仰せらる。一條を讀み終るたび毎に、「申す所ことわりにこそあれ。」と仰ありて、十餘條を讀み終へて後、我を諫めんこと、この度に限るべからず。この後も思ふ所あらんには、憚る所あるべからず。汝が志のほど神妙の至なり。」と感じ仰せ下されしかば、彼の人、悦に堪へずして罷り出づ。正信、御前に在りしに、「唯今の申條いかに聞きしぞ。」と仰ありしに、「事皆細碎にして、國家の大務にあらず。殿の用ひ

させ給はんこと一條もなしと承り候ひぬ。」と申しけるに、御手を振はせ給ひて、「いや、彼が智を竭して思ひ謀りし所なり。その智の拙きは如何にせん。彼が年頃時を得て、我を諫めんと思ひしことこそありがたけれ。世の人自ら我が過を知ること多からず。過と知りなば、誰か過つべき。善しと思ひ誤るより、過はあるなり。卑しき人は、親族朋友互に諫め争ふこともあれば、過をも知りて改めぬ。是卑しきが一つの益なり。位貴き者には、親族も交り疏く、まして、朋友といふものもあらず。朝夕日夜、我が前に伺候する者、如何にもして、主の心に逆らはざらんことをこそ思ひはかれ。いかでその過をたゞさんと思ふに暇あらんや。たゞひ稀有にして諫めんと思ふ者ありとも、その過の大ならんことをこそいはめ。少しのことならんには、さて止みなん。凡そは、少しなるが積りてこそ、大なる過にもなれ。過既に大なるに至りては、いかに悔ゆと

も及び難きこともあるなり。されば、我が聴くほどのこと、皆耳に逆らふことなく、一生我に過ありといふことを知らで過ぎぬ。是高きが一つの損なり。古より家を滅し國を失ふも、皆諫を聞くことなくて、我が過を知らざるが故にあらざや。このことを思ふに、たごひいかなる僻事ならんにも、我を諫むることならんには、皆忠言ごこそ思ふべけれ。ご仰ありき。「あり難き御心なりけり。」ご頻りに涙を流して語りしに、正純聞きて、その人は誰なるらん。又いかなる事をか申しけん。ごいふ。正信聞きて氣色損じ、その申しし事も、その人をも、汝が聞きて何の益かあるべき。ご答へきごなり。この問答にて父子の相遠きこと量り知るべきにや。(第十二)

### 樂訓抄

#### 樂訓に就いて



貝原益軒

貝原益軒、名は篤信、字は子誠、通稱は久兵衛、益軒は其の號、又損軒とも號した。福岡藩の士、寛永七年を以て生まる。幼にして頗る苦學し、或は醫を父に受け、或は佛書漢籍を學んだが、遂に儒學を以て世に立たんことを志し、中年にして京都に講學した。又好んで各處に旅行し、足跡海内に遍しと稱せられる。後に郷藩に仕へて優遇を受け、七十一歳にして致仕したが、正徳四年約二一〇年前八十五歳で郷里に歿した。

益軒人と爲り謙讓にして篤厚、初め陸王の學を好んだが、後、斷然朱子學を奉じた。博覽にして強記、著書實に一百有餘種、皆世人を裨益するを以て志とし、經學に關するものの外は、大抵國文を以て記した。蓋し、その解し易く入り易からんことを旨としたのである。益軒が社會教育家として、徳川氏三百年の間、その右に出づる者

なしと云はれる所以は、實に此にある。

益軒の著書凡そ一百種、就中最も有名なものは家訓君子訓大和俗訓樂訓和俗童子訓五常訓家道訓養生訓文武訓初學訓の所謂益軒十訓である。本篇抄録する所の樂訓は即ちその一で、人生和樂の道を説いて平易深切を極めたものである。その文章の妙味に就いて五十嵐(力)博士の説に曰く

益軒の文章を読んで見ると、文章としては是といふ妙處もなく、際立つて弾んだ處や鋭く人を刺戟する所もないが、而も何處となく靜かな落ちついた品位があり、作者の溫和な人格穩かな人生觀が、微塵も氣取氣のない、懇ろな溫和い文字を通して、讀者の胸に沁みこんで來るやうに感ぜられる。譬へば東風の春温を傳へ、埋火の人體を煖めるやうな趣で、角のない、辣味のない、而して深く人を教ふる、丸い、温かい、穩かな、老爺の愛孫に對するやうな、親切の氣に満ちた一種の手振さすが元祿時代の啓蒙運動を引受けて、聖人の高尚な教説を噛み砕いて民間に傳へようとした我が益軒先生ならではと、しみじみ面白く有難くなる。これが、私の益軒を読む時に感ずる中心第一の興味である。

大體に於て、漢文家の國文の中で、強い調子の代表者を白石に求め、穩かな温かい調子の代表者を益軒に求めても、差支なからうと思ふ。

### 一 山水風月の樂

内の樂を本とし、耳目を以て外の樂を得る媒として、其の欲に惱まされず、天地萬物の景氣の美はしきを感じれば、其の樂限りなし。この樂、朝夕常に目の前に充ち満ちて餘りあり。これを樂しめる人は、即ち山水月花の主となりて、人に乞ひ求むるに及ばず。財もて買ふにあらざれば、一錢を費さず、心に任せて恣に取りて用ふれども盡さず。常にわが物として領すれども、人いさはず。いかなることなれば、山水風月の佳景は、もごより定まれる主なければなり。かく天地の内きはまりなき樂を知りて樂しめる人は、富貴の驕樂を羨まず。其の樂富貴に優ればなり。此の樂を知らざる人は、樂しむべき事目の前に常にみちくして多けれど、其の樂を知らざれば、樂しまず。世俗の樂は、其の樂未だ止まざるに、早くわが身の苦

すれは、  
叱らす。

ごぞなれる。たごへば、味よき物を食りて、恣に飲み食へば、初は快しごいへど、やがて病起り身の苦ごなれるが如し。凡そ世俗の樂は心を迷はし、身をそこなひ、人を苦しましむ。君子の樂は迷なくして心を養ふ。外物を以ていはゞ、月花を愛で、山水を見、風を吟じ、鳥を羨むの類、其の樂淡ければ、ひねもす樂しめごも身に禍なく、人のごがめ神のいさむるわざにあらず。此の樂、貧賤にしても得易く、後の禍なし。富貴の人は其のおごりおこたりにすさみて、此の樂を知らず。貧賤の人はこの二つの失少し。志だにあれば、此の樂を得やすし。

二 光陰箭の如し

梓弓云々  
梓弓春立ちしより年月のいほゆるかな  
(凡河内躬恒)

梓弓春立ちしより年の暮れ行くまで、射るが如くにおもほゆれば、時日のはやく過ぎ行くは、ごごめあへず。うべも、ごしご名づけ、

としくゝに  
唐の劉延之の詩に、年々歳々花相似、歳々年々人不同。

又、ごきご云へるならん。されば、光陰箭の如く、時節流るゝが如し。ごいへるも、浮けるごごにあらず。老にむかへば、猶更に年月のはやく過ぐるごご、恰も飛ぶが如し。あごをかへり見れば、いそごの齡をすぎごしも、さのみ久しからず。たごひ、いそごの後、又いそごの齡を経て、百年にいたるごも、なほゆくさきの月日、愈はやくして、程なくつきなんごご思ひやられ侍る。いくほごなき残れる齡を、樂みてこそ過ぐさまほしけれ。愁ひ苦みて空しく過ぎなんは、いごおろかなりや。としくゝに花は相似たれご、ごしごしに人は同じからず。老かさなれば、一ごせのうちにも、やうく衰へ行きて、今の昔に若かず、後の今に若かざる事を知りて、かねてより悔なからんごごを思ひ、時日を惜しみ、一日もいたづらに過すべからず。今日暮れて、明日もありごてたのむべからず。今日の日のうちを日々に惜しむべし。

二 光陰箭の如し

### 三 清 福

清福といふ事あり。樂を好める人、必ずこれを知るべし。是識者の樂しむ所にして、俗人は知らず。この故に、わが身に清福を得て、大なる幸あれども、之を知りて樂める人まれなり。たとへば、寶の山に入りても、寶を知らざれば、手を空しくして歸るが如し。清福は、富貴の驕樂なる身にはあらず。貧賤にして時にあはずとも、其の身安く靜かにして、心に憂なき、これなん清福とぞ云ふめる。暇ありて、閑かに書を読み、古の道を樂しむは、これ清福のいと大なる樂なり。又、其の心風雅にして、古書を読み、詩歌を吟じ、月花を愛で、山水を好み、四時のおしうつる折々の美景と、草木のかはるがはるさかえうるはしきを見て、樂しみ、貧しけれど、飢寒のうれひなく、蔬食口になれぬれば、味ありて、肥濃なる美味をうらやまず。淡

薄なるは、かへつて身をやしなふに宜し。布の衣、紙のふすま、いさゝか寒を防ぐに足れり。葎生ひて荒れたる宿に起臥しても、風寒のうれひなかる可し。もし幸に書をおほく貯へて、架にさしはさまば、貧とす可からず。是、眞の寶なれば、滿籟の金にまされり。又、良友ありて道を論じ、同じく月花を賞して、樂しみ、名區佳境に遊びて、其の地のことなる形勝をもてあそぶ、是皆清福を得たるなり。かかる福をうくるは、富貴の驕樂にまさりて、幸甚し。

### 四 旅行の樂

旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水の美はしき佳境に臨めば、良心を感じ起し、鄙吝を洗ひ濯ぐ助となれり。是も亦わが徳を進め、知を廣むるよすがなるべし。又、いひ知らぬ異境に行きて、見馴れぬ山川の有様を見て、目を遊ばしめ、其の里人に逢ひて、其の處の風

よすが  
たよりとする  
所。



萬戸侯  
支那にて一萬戸の封邑を領する諸侯。

土を問ひ、あるは奥まりたる山ふところに岩根踏みて尋ね入りなごずる時は、山水の癖ありて青山夢に入る事しきりなる人は、心をこめて歸ることをも忘れぬべし。あるは海べた山遠き眼界廣き眺は、萬戸侯の富にも優れり。又其の里に生ひ出でたる名産の異なる品を見て、其の味を試みるも、いと珍しく、心慰むわざなり。すべて勝地に遊ぶことはたゞ一時の耳目を悦ばしむるのみならず、幾年経ぬれど、其の時見聞せしありさま、老の後までをりく思ひ出でられて、楽しきものなり。世にめでたき事を思出といふも、むべなるかな。

五 四つの始

春はまづ一夜の程にあらたまの年立ちかへる朝の空の光、心づからにや、舊年にかはりて長閑けし。睦月はこことたつこて、貧しき

あらたまの  
今朝よりや春はきぬらむあら玉の年立ちかへりかすむ空かな(續俊拾遺、藤原爲世)

春盤  
正月に松竹鶴龜などを作りてする栗、榎、海藻、蝦、蜜柑、米、柿などを盛りたる盤なり。

谷を出て

出<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>幽谷<sub>一</sub>遷<sub>二</sub>于<sub>一</sub>喬木(詩經)

初春の初音  
初春の初音の今日の玉簪手にとるからにゆらぐ玉の緒(大伴家持) 緑の松も 常磐なる松の緑も春來れば今一入の色まさりけり(古今集源宗子)

家にも春盤などいふ物をまうく。又土器取りいで大神酒すゝめて、先づつこめて父母にこごぶきし、次に自ら祝し、賓客にももてなすさまなど、常にかはりて、いとなんいみじうめづらかなり。

時は、今は四つの始なれば、空のけしきやうく改まり、こち風ゆるく吹きて氷解け、遠き山邊に霞の薄くたなびける、さまざまに物けざやかに見えて、冬の空に立ちかはれるよそほひ、まづ春の來れるしるしあらはなり。垣根がくれに、冬より残れる雪の、處々はだれに見ゆるも、去年の名残惜しむべし。待ちわびし梅の匂百花に先立ち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を出で高きに遷る鶯、春を迎へて物わかき聲、初春の初音の今日にあへる、耳とまりてこほしく、花ならで身にしむ物ならし。花を愛で鳥を羨むは、これまづ春のたまものなり。是を始として、猶行く先遙かに榮ゆる春のゆたかなる恵たのもし。千年を経べき緑の松も今一入の色をまして、

五 四つの始

韓文公  
名は愈、字は  
退之、唐の大  
儒

常に見馴れしも、いや珍しくなづさはれぬ。韓文公が「最是一年春好處。」といへりしは、早春の景色、一年のうちにて、殊にめづらかに勝れたる故なるべし。

六 花ざかり

花もやう／＼咲き續きて、梅花既にうつろひて後新なるは、わが國ならぬからも、の花なるべし。桃、紅なるは、たなびく雲の面影のたつ心地す。李白きは、消えがての雪の梢に残れるかと思えていごうるはし。

櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動かしてえならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多きが中にも、第一の見ものなれば、梅散りて後、この頃のこそ花は皆けおされぬ。されど日頃待たせ／＼てやう／＼咲けるが、飽くまで見る程もな

よしさらば  
の歌

續古今集にあ  
り

古の人

藤原爲家を指  
す

く疾く散るは、又うらめし。「よしさらば散るまでは見じ山櫻、花のさかりを面影にして。」古の人の詠みけんも、後の思出にせんこにや、情深し。

春やう／＼深くなれば、風和かに日暖かに、百草芳を争ひ、群花艶を競ふ折なれば、何れの處か春のなからんや。かゝる景色にふれては、人の心も浮きたちて、思ふごちかいつらね、春を尋ねてあくがれありき、ひねもす花を眺め暮すこそ、目を恣にし心を快くするわざなれ。世の中の、いみじく嬉しき事のあるが中なる、其の一つなるべし。わが心の樂を知らざる人は、無頼の少年の閑を偷みてそゞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏に空しきも、この折なり。杜が詩に「鶯の歌あたゝかにして、正にしげし。」といひ、陳希夷が「野花啼鳥一般の春。」と詠ぜしも、皆この時なり。花に坐し月に酔ひて、二つながらかねたる樂、春宵一刻値千金、花有

杜

杜甫、字は子  
美、唐の詩人。

陳希夷

名は搏、五代  
の隱士、唐の  
太宗尊んで希  
夷先生といへ  
り

春宵一刻

宋の蘇軾の春  
夜の詩

惜花 林布逸の希題の詩  
あたら夜の あたたら夜の月と花とを同じくば心しれらむ人に見せばや。(後撰集、源信明)  
夜の間の風 朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに(拾遺集元良親王)

清香月有陰。いふ詩を思ひ出でられぬ。又「惜花春起早、愛月夜眠遅。」いへり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人のあたら夜の月と花とに背きて空しく臥すは、いと惜しむべし。又夜の間の風のうしろめたきをも知らで、朝起くること遅きは、花を惜しまざるなり。

七 夏木立

なづさふ 馴れ添ふ。

夏もやうく深くなりぬれば、木として茂らざるはなく、草として榮えざるはなく、日々に物をひき延ぶるやうに見えて、ひたすらに緑の色深き夏木立こそ、花にもをさく劣るまじけれ。春の花はごころくくに咲きて稀なり。夏は山も里も、ありとしある草木ごとにうちはへて、皆緑の色なれば、春に異なる眺なり。八千草に植る集めてなづさひし前栽の草木ども、雨を帯びて、各、その梢をあ

昔おぼゆる さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする(古今集、讀人不)

白樂天 名は居易、樂天と號す、唐の詩人。

わらふだ 藁・香・蘭などにて濁の如く圓く編みたるしとね。圓座のこと。

らはし、所得顔に心に任せて生ひ茂れるも、嬉しと見ゆ。昔おぼゆる花橘の薫れる夜は、追風もいこなつかし。早苗採る頃、田家は雨を待ち得て、忙はしく賑はし。此の頃遣水のほごりに飛ぶ螢の、音もせですだくを見れば、鳴く蟲より憫むべし。夏山の景色、青み渡りたる高き峯、大空に連なりて雲の外に聳えたるを、飽くまで見るこそ、殊に勝れて心を快くする眺なれ。白樂天が「眼を放にして青山を見る。」いへるが如し。

八 端居の風

水無月の頃になりぬれば、端居の風したしく、わらふだ敷きて居るも快し。池の心深く、蓮葉の濁にしまずして、花ならで夕風にほひ渡るだにも、こと草にすぐれたり。殊に花の笑の唇開けたるは、所せきまでかをりみちて、世に似たるものなく清らなり。涼を

清少納言

清原元輔の女、一條天皇の皇后(定子)に仕へ、才學を以て著はる。その隨筆枕草子に、夏は夜、月の頃はさらなり、闇もなほ、螢とびちがひたる、雨などのふるさへをかし」とあり。

このねぬる

このねぬる朝の風の變るより萩の葉そよぎ秋や來ぬらん(新後拾遺集)

阮籍

晉人、竹林七賢の一人。

逐ひて木蔭に休らひ、木々の下風のなつかしきに、清き泉を掬び、夏を忘るゝ心地するも、いさぎよし。光明らけき夜半の月を、清き水に宿して見るは更なり、遣水の音など聞くも、いみじう心ゆくばかりなり。日頃經て暑さ堪へ難きに、夕立のしぐれわたりて、名殘涼しきもいと快し。清少納言は「夏は夜」といひつれど、夕は蚊といふ蟲人を螫して、年老いては殊更いみじう堪へ難ければ、只このねぬる朝けの風の涼しき景色こそ、清くして心にかなひつれ。

九 萩の下露

秋來ぬれば、初風涼しく打ち吹きて、草木のそよぎ、秋の聲の、何處にも打ちなびきて聞ゆるこそ、初春の風にかはり、心をいたましめ、身にしみて、金風の至れるしるべと覺ゆれ。きりくすの階のもごにすだくも、折知り顔に聞えさす。阮籍が懷を詠ぜし詩に、開秋

大暑退き

大暑去、酷吏、新涼來、故人。(杜牧)

兆涼氣、蟋蟀鳴、床帷。といひしも、此の頃の景氣をいへるなり。大暑のやうやく退き、新涼すでに來りぬれば、恰も酷吏の去りて、故人の來れる心地ぞすなる。此の頃は、人の形氣、ちからを得て、燈も親しくなりぬれば、古き書ども卷き舒ぶるに、ごきを得て、萬の樂にまさり、こよなうおもしろし。萩の上風、萩の下露、さまざまの蟲の音皆秋のあはれを催して、身にしむこと限なし。門田の稻葉、朝露にうるほひ、夕の風おとづれて揺ぐけしき、ここさら、わせ、おしねの、さきだちおくれて、穗に出でたる有様、皆見るに堪へたるながめなり。

一〇 秋草

「花は春」とこそいへれど、秋も亦花多かめり。殊更野邊に立てる秋草の名も知らぬ花ども、多く草叢に紐解き錦をさらすが如く見ゆれば、秋の野なかくにめづらし。秋の花の久しきにたへて散

けやけし  
特に際立ちて  
あり。

春はたゞ

緑なる一つ草  
とぞ春は見し  
秋はいろく  
の花にぞあり  
ける。(古今  
集、讀人知ら  
ず)

歐陽子  
宋代の文豪歐  
陽修。

りがてなるは、春の花の見る程もなく、早く散りぬるに勝れり。凡そ花のいこけやけきは、春は梅、櫻、桃、李、海棠など、木々の花多きは、陽氣は先づ空に昇れる故にや。秋は萩、女郎花、尾花、葛花、撫子、藤袴、朝顔、この七種（七種）の外、桔梗、龍膽など、くさくさの花猶も多かり。秋はまづ陰氣下へ降れる故ならずや。撫子、春はたゞ一つ草のみ見ゆれど、夏より咲き初めて、秋の色を表せるは、からの大和の、いろいろの花ぞ咲くめる。長月の頃は秋の花も過ぎ、紅葉もまだしき折なるに、菊は百花に後れて、ひこり晩節を保ち、霜に誇りてみさをの色を表し、なべての花に、時を異にするのみならず、色、形、匂ともに殊に勝れて、あでやかなれば、此の時もし花多くとも、わきてあはれむべきに、秋の末に獨り盛りなれば、折に遇ひていこめでたし。菊は品高くして、世ばなれたる花なれば、や、これを好む人少し。牡丹は富貴なる物なれば、近俗の益、耽ること、宜なり。歐陽子が人の心

は、其好む所を以て知るべし。こいへる、げにさる事ぞかし。

一一 埋火

少し春ある

埋火にすこし  
春ある心地し  
て夜深き冬を  
ながさむるか  
な。(風雅集、  
藤原俊成)

木の葉ふり  
て  
冬の來て山も  
あらはに木の  
葉ふり残る松  
さへ峯にさび  
しき。(新古今  
集、祝部成茂)

冬も來ぬれば、今朝より馴る、埋火のもと、やうく立ちはなれ難し。露と霜とおきかはし、紅葉色濃く、木々の梢、淺茅が原も冬枯の景色となり、面がはりするも、秋に異なる眺なり。神無月の時雨も過ぎて、日暖なれば、少し春ある心地す。うべこの月を小春とぞいへる。されど一の日、二の日漸くかさなれば、風氣愈劇しく、木の葉ふりて山もあらはに見え、残れる松も峯にさびし。春夏秋の艶なる景色、よそほしかりつる有様、皆此の時に至りて盡きぬれば、殊の外にも變れる空かなと、目驚かれぬ。日ごろ雪いみじう降りて、いかめしう積りたる曉は、山も里も、ひたすら銀世界となりて、世かはり景色異なる有様なり。冬籠せし

はだれ雪  
斑にふりたる  
雪。  
いらんき  
寒さに毛穴立  
つ。

梢の枯れたるも、再び花咲けるが如し。殊更冬の夜のすめる月に雪の光りあひたる空こそ、見る人なく獨り身にしみて、哀も深けれ。空晴れて後まで、友待つばかりどころどころに消え残りたるはだれ雪も、いご心にくし。かかる時、する業なく、たゞ袖くゝみしていらゝき居る人は、いごわびしげに見ゆ。或は埋火にむかひ、文も巻きひろぐるを以て業とする人は、樂深くぞありぬべき。凡その事、年に先立ちて早く計るべし。若き時勉めて文を讀み習はず、かかる時もわびしかるまじ。

一一一 守 歳

冬の末つ方にも至りぬれば、今年の日數殘少く、こよみの軸あらはるゝばかりにて、春の鄰すでに近し。年の終るは惜しむべく、齡のかさなるはうれはしけれど、新しき年を迎ふるは、珍らかにて喜

一とせは  
一とせは果敢  
なき夢の心地  
してくれぬる  
けふぞ驚かれ  
ぬる。(千載集  
前律俊宗)

ぶべし。この頃は、世の中の人何くれと忙はしく、せきあへず、多くの、しりて走り惑ふを、獨り靜かに見る人は、樂しむべし。一とせは、果敢なき夢の心地して過ぎぬれば、後を顧みてせちに名殘惜しむべし。老の身は月日もいごたち易く、何程もなき一とせなるを、數へ添ふるも恨めし。されど人の世を経るは、思はずも變多き事なるを、一とせの内、禍なくて過ぎぬる人は、亦樂しからずや。春秋の暮れ行くだに、名殘惜しむべし。まいて一年の終の今日の日、夕暮になりぬるをや。唐土の人は、守歳といひて、今宵はよもすがら寝ねずこかや。これ、ふるきを送り新しきを迎ふる心なるべし。送迎につきて、憂喜一かたならず。凡そ四つの時の推移る折につきて、感を起す人は、情深し。愁人はこれによりて悲しみ、達士はこれによりて樂しむ。景氣は同じけれど、只見る人からえんにも、凄くも思ほゆるなるべし。

一三 六つのたすけ

書を讀み字を寫すに、明らけき窓、いさぎよき机、筆硯紙墨の精良なるを得て用ふるも、亦人生の一の幸なり。この樂を得るもの少しと蘇子美がいへり。古には壁を穿ちて書を読みし人だにあれば、今この六つの助を得て、又燈火をやや親しむ人は、幸ありと思ひ、努めて書を読むべし。

一四 つくぐと思へば

つくぐと思へば、樂おほき此の世なるを、道を知らざれば、われと心をくるしめ、天をうらみ、人をこがむ。かく道を知らで、うれひ多き人は、くれまごふ心の闇こそ、むげにおろかなりと謂ふべけれ。人の身、金石にあらず、生けるもの、つひに死なざるはなし。又ふた

蘇子美 名は舜欽、字は子美、宋の人は子美、宋の壁をうがちて云々 前漢の匡衡、學を勤め燭無し。壁を穿ちて隣舎の燭光をひき書を読みたり。後丞相となる。

この世なる間は

生けるものつひにも死ぬるものなれば、この世なる間は、樂しくあらなむ。(眞葉集、大伴家持) 飛驒匠 とにかくに物は思はず飛驒匠打つ墨繩のただ一筋に人磨

朝に道を 子曰、朝聞道、夕死可矣。(論語)

たび生れくる身にしあらざれば、此の世なる間は、樂しみてこそありぬべけれ。悔しく過ぎし昔の事は、すべきやうなし。いくばくならぬ齡なれば、今より後、一日も早く日月を惜しみ、先の僻事を悔いて、飛驒匠うつ墨繩にあらねども、只一筋に善を好み、道を樂しみて過さんこそ、此の世に生けるかひあるべけれ。年老いては、同じことするならひなれば、海士のだぐ繩くりかへし、かく言ひて、玉筍あけくれみづから心を戒め、又、人に樂をすゝむる媒とするならし。かへすぐ、われも人も、かく生れつる樂を知らで、身をいたづらになし、さてもかひなく、世に朽ちなんこと、怨むべし。もし朝に道をきければ、人となれるかひありて、夕に死ぬとも、また何をか怨みんや。

國語讀本 卷四終

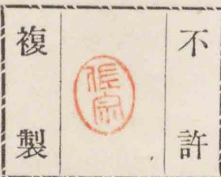
齋藤柏男

大正十三年十二月十六日印刷  
 大正十三年十二月十九日發行  
 大正十四年二月廿一日訂正再版印刷  
 大正十四年二月廿四日訂正再版發行  
 昭和三年十一月一日改訂印刷  
 昭和三年十一月四日改訂再版發行  
 昭和四年三月十七日改訂再版發行  
 昭和五年二月十八日改訂六版發行

昭和國語讀本改訂版

卷數	定價	昭和五年度臨時定價
一、二、三	各金四十七錢	金七十七錢
四、五、六、八	各金四十六錢	金七十五錢
七、九、十	各金四十五錢	金七十三錢
四	金四十四錢	金七十二錢

昭和四年三月十五日  
 文部省檢定  
 中學校國語科用



編者 上田 萬年  
 同 榮田 猛猪  
 同 鹽野 新次郎  
 發行兼印刷者 株式會社 啓成  
 右代表者 布津 純一  
 印刷所 東京市芝區芝浦町二丁目三番地 進舍

發行所

株式會社 啓成社  
 東京市京橋區加賀町一番地

電話銀座(57)二四九四番  
 振替東京一〇五五番

山陽中學校第二學年一組



